

神戸市総合基本計画審議会第1回総会 会議要旨

1 開催日時：平成21年7月27日（月）13：30～15：23（於：1号館14階大会議室）

2 議事要旨

- ・会議に先立ち、矢田神戸市長の挨拶、引き続き、事務局より神戸市総合基本計画審議会の設置についての説明（資料1）、並びに委員紹介（資料2）が行われた。
- ・審議会規則第5条第2項に基づき、委員の互選により新野幸次郎委員が会長に選出された。また、副会長は、同規則第5条第3項に基づき、安田丑作委員が新野会長により指名を受け、審議会会長及び副会長の決定がなされた。
- ・矢田神戸市長より、新野会長に対して、次期神戸市総合基本計画について諮問が行われた。
- ・新野会長による就任の挨拶がなされた。
- ・審議会規則第3条第2項に基づき、審議会に専門的審議を行う専門部会（都市空間部会、市民生活部会、活力・魅力部会）と専門部会間の調整を行う調整部会の設置を決定したほか、各部会の審議状況に合わせて、適時、部会の設置などに関して会長に一任すること、また、同規則第7条第2項並びに第3条第3項に基づき、各部会の部会長および副部会長、並びに委員の所属部会の会長による指名、そのほか委員は所属部会以外の部会にも参画できるよう運用を行うことなど決定し、了承された。

（各部会の部会長及び副部会長は以下のとおり。）

- ・都市空間部会：部会長 安田丑作委員、副部会長 盛岡通委員
 - ・市民生活部会：部会長 松原一郎委員、副部会長 牧里毎治委員
 - ・活力・魅力部会：部会長 加藤恵正委員、副部会長 齊木崇人委員
- ・会長により議事に入る旨、発言があり、事務局に対して審議資料の説明を求めた。
 - ・事務局より、「神戸づくりの指針策定にあたっての基本的考え方（資料3）」及び「審議いただく「神戸づくりの指針」における主な取り組み（資料4）」の説明がなされた。
 - ・以下、審議会における主な発言は以下のとおりであった。

【神戸づくりの策定にあたっての基本的な考え方について】

- 計画を策定する上で、神戸市で実施してきた都市ビジョンの経緯を知っておくことは非常に重要であり、分かるようにしてほしい。
- 2025年に向けバラ色の未来ではないと認識している。ただ、将来に向け夢のある計画として欲しい。
- 関西科学技術セミナーで、日本のナショナルビジョンを15文字以内で簡潔に言い表す例示として「人類の生存に貢献できる国」という発言があった。神戸においても簡潔に言い表せるビジョンがあっても良い。

【部会運営について】

- 部会での議論が多少縦割りであるが、安全、情報化など横割りのテーマも存在する。マトリックス化し、複数の部会で議論していくテーマを考える必要があるのではないか。
- 地域担当制やエリアマネジメント（管理運営システム）など複数の部会にまたがる事項については、他事共通の特別部会を設置してはどうか。
- 各部会の中で部会の枠に留まらず議論していただき、それぞれの議論について情報交換しながら

ら進めていきたい。いくつかの部会に跨る案件については、部会長、副部会長から構成する調整部会で、調整したい。

【計画への位置づけに対する意見】

(災害と医療について)

- 「災害などの危機に備えた安全な都市空間の構築」では防災に関し記載しているが、災害発生時には、まず、医療を必要とされる方が多数発生するため、医療施設へのアクセスなど医療のハード面での視点も大切になる。
- 医師会、災害医療センターおよび神戸大学の医学部などと連携もしながら、感染症や大災害が発生した場合の備えが必要である。

(NPO活動、ボランティア活動について)

- 神戸市内でも、高齢者支援、環境保護などNPO法人が550を超えており、「支えあうまち」に記載を充実して欲しい。また、震災以降のボランティア活動により、人生観が変わったという人が多い。ボランティア活動についての位置づけを考えて欲しい。

(次の世代の教育について)

- 「次の世代を育む」は、幼稚園より、小中学校の義務教育が中心になっている。豊かな心や体力といったものは、幼稚園における基本的な生活習慣などの教育を除いて育むことはできない。幼稚園や保育所から大学まで、教育として捉え議論すべき。

(情報化について)

- 情報化、情報ネットワークの記載が弱いのではないかと。また、情報化によりハザードマップ、携帯電話との連携もできるようになってきている。市民と神戸市が連携できる情報を提供するサイトの頻繁な見直しをお願いしたい。

(世界に開かれたまちの視点について)

- 構想に「世界にふれあう市民創造都市」とあるが、神戸は他の都市に比し、世界に開かれたまちであって欲しい。世界標準という視点を常に意識して欲しい。

(商業活性化について)

- 商店街・小売市場の活性化施策は、商業構造が変わっているなか、地域の賑わいづくりの施策だけでは議論できないため、検討が必要である。

(地方分権について)

- 広域行政について問題意識が必要。15年先の地方分権への方向性を考えた上で、議論した方が良い。

【用語などの使い方について】

- 「神戸づくり」が安易に使用されている。定義や使い方についての留意が必要である。
- メガ・リージョンなど横文字が多いが、「広域連携都市圏」と和訳すると本来もつ意味が分かりにくい。ただ、市民に対しての配慮が必要である。

- ・会長により、本日の議事に係る質疑応答の終了が告げられ、今後、部会ごとに審議資料(資料6)について議論を進めていくことが確認された。
- ・最後に、会長から事務局に対し、「神戸市総合基本計画審議会総会及び部会の開催日程(21年度)(資料7)」の説明を求め、事務局より今後の部会、総会の開催日程について、資料に基づき説明を行った。
- ・会長により閉会が告げられ、本会議は終了した。

神戸市総合基本計画審議会第1回都市空間部会 議事要旨

日時：平成21年8月28日（金）10：00～12：00

場所：神戸市役所1号館14階大会議室

出席委員：安田丑作部会長ほか委員18名

【議事要旨】

- ・企画調整局末永参事、安田部会長の挨拶のあと、事務局より、第1回総会会議要旨（資料3）及び今後の都市空間部会の運営（資料4）について説明があった。
- ・安田部会長から議事次第に従い議事に入る旨発言があり、本日の議題である「都市空間部会審議資料」（資料5）について、事務局より順次、説明が行われ、審議された。

（審議内容についての委員意見は以下のとおり。）

【議題：全体構成 及び 1 めざす都市空間の全体像】

（全体的な考え方）

- ・人口減少社会に対応するため、人口密度を低下させるのか、まちを縮退させるのかということも大きな視点で捉えておくべきである。特に田園部、ニュータウンをどう考えるのか。
- ・総論的に将来をめざす方向を書くことは分かるが、過去の反省に立つことが必要ではないか。
- ・これまでの神戸のいいところを伸ばしつつ、やはり転換する部分は、このように取り組んでいくという決意・姿勢がこのマスタープランの全体像にいるのではないか。
- ・すばらしい人材という資産があることに気づいていないのではないか。市民との協働という文章表現はあるが、具体的な取り組みの形が見えない。
- ・例えば「3 地域が主体的に取り組む地域環境をつくる」では、今までの経験をふまえた記述にはなっているが、取り組みの方向性のところへもう少し具体的な文言を盛り込んでほしい。
- ・具体的な取り組みの表現について、指針と重点施策計画の書き分けの整理が必要である。
- ・基本的な視点に「都市空間の形成を市民・事業者とともにめざしていきます。」の記述があるが、災害も環境も人が一番大きな問題になる。3の「人が交流・融合する「みなと」の創造」のところで記載している文言を基本的視点のところへもっていくべき。例えば、「活力・知力・魅力にあふれ、人と人が強い絆で結ばれた都市空間の形成をめざします。」としたほうがよい。
- ・まちづくりには外部の力が必要であり、都市空間では市民ということに限らず、広く、多くの人と捉える方がよい。

（災害などの危機に備えた安全な都市空間の形成）

- ・南海、東南海地震が2020年から2040年の間に起こるといわれている。今回の15年の計画に、東南海地震などに対応した都市機能を備えるなど、記述内容を充実させてはどうか。また、どんなイメージの災害が起こるのか市民に伝える記述の工夫が必要ではないか。
- ・地震が起こっても、被害については場所ごとに異なる。表面上同じに見えても、その土地がどのような成り立ちでできているのかを知ることが大事である。

（デザインの視点で磨かれた魅力ある都市空間）

- ・デザイン都市・神戸だが、そのドライビングフォースが大事と感じている。デザイン都市・神戸について、市民を巻き込んで、理解を深める取り組みが必要である。

- ・夜間景観をクローズアップしてほしい。イベント的ではなく、固定した形での夜間景観の創出により神戸らしい景観をめざすべきではないか。
- ・神戸にもっと人に来てもらうためにどうするのかの背骨の部分が見えにくい。神戸には対内的、対外的にアピールできるはっきりとした顔が必要だと思う。

(低炭素社会を実現する持続可能なまちをめざして)

- ・新しい環境産業や環境に寄与する技術を地域特性に合わせ、活かしていく視点が必要である。
- ・ゾーンごとに、自然の資源をいかし、ポテンシャルを保全・活用・発展させ、適切な土地利用を誘導することも重要になる。また、新しい環境産業により、神戸の活力を高めるとともに、自然の保全などうまく共存できる計画とする必要がある。

(めざす都市空間の全体像 図面について)

- ・ゾーン構成について、神戸は、まち、田園、みどりのゾーンだけでなく、まちと一体となった海（水、水面）のイメージが重要である。
- ・水とみどりの戦略についても海や河川を意識した記述が少ない。河川については六甲山系から瀬戸内海に対して直接流れ込んでいることが神戸の大きな特徴であるが、防災面も含めて空間構造や文言でも触れられていない。
- ・各ゾーンが相互に接している部分も非常に重要である。
- ・全体像の図では、従来の動脈型で物や人の動きに対応したインフラを整備する印象を受ける。環境インフラなど静脈型の部分が見えてこない。静脈型には表現が難しいが、歴史資源も含まれる。
- ・図を見ると、東西の交通は充実しているが、田園地域など六甲山を越えた部分を含め南北の交通ネットワークが薄い。ブラジルのクリチバ市のバスをうまく使った交通システムなどを神戸市でも考えられないか。また例えば元町から三宮までについては、車の乗り入れを規制し、歩行者天国のようにしてもよいのでは。

(用語、構成について)

- ・地域力、知力 などの言葉がわかりにくい。定義や使い方については工夫が必要である。
- ・全体像の構成について、1では4つの基本的な視点、2は横断的な低炭素社会の実現、3は神戸で特に打ち出しとしてやることが記載されている、というような全体構造の解説が必要である。

[委員からの主な意見に対し事務局より行った回答及び補足説明は以下のとおり。]

- ・転換点における計画であること、また環境に関すること、ゾーンの概念(水の視点)、全体像の相互関係については、原案作成の中で、記載内容について検討していきたい。
- ・南北交通軸について、都心域の交通ネットワーク図を提示しているが、南北の軸を記載するなど、南北交通についても大事であると考えている。
- ・人口減少という予測について、出生率をあげることや神戸に人を定着させる努力も必要と考えているが、大きな単位で今後とも人口増加を前提とするのは難しいと考えている。取り組みの目安として、概ねの今の人口を想定し、市街化区域の拡大を抑制する方向を示している。
- ・市民との協働について、具体的な取り組みの検討にあたり市民・事業者と情報を共有しながら進めていきたい。

【議題：2 めざす都市空間を形成するための分野別の取り組み

(1) 秩序ある土地利用の誘導 (2) 海・空・陸の総合的な交通環境の形成】

(秩序ある土地利用の誘導)

- ・社会情勢をふまえると、今回はディフェンスの計画を作ることだと思う。ディフェンスは悪いイメージをもたれるが、それができないとまちがもたない。その中でどういう都市像を打ち出すのか。土地利用は、市街化区域の拡大抑制などディフェンシブな発想で書かれているが、明確な表現が必要。また、もう少し踏み込んで、縮退など守れないところも出てくることに触れ、守れないところのサポートの記載も重要である。
- ・田園ゾーンの記述に地産地消、まちづくりとの連携というキーワードをいれてはどうか。また市民の食生活を守る視点で、自給自足をめざすことを記載すべきでは。(水と緑を大切にした都市空間の形成)
- ・都心域での高層マンションの問題は、喫緊の課題である。
- ・秩序ある土地利用の空間像を実現するために人がどう関わるかということも、記載が必要。全体像のところ、みどりを維持するための地域別の取り組みや協働についての記述があれば整合性がとれる。

(海・空・陸の総合的な交通環境の形成)

- ・2 (1) ①広域交通ネットワークの形成は非常に大事な取り組みであるが、財政が大変な状況でほとんど実現が不可能だと思う。都市計画道路内は規制がかかるが、計画決定後、放置されており、プライオリティの検討・実施が必要。
- ・交通については、既存の公共交通の有効利用とあるが、既存交通インフラの利用とそのメンテナンスが非常に大事である。
- ・超高齢化社会への対応は公共交通だけではないと思う。パーソナルな移動手段も含めた記載が必要では。新しい公共交通のあり方を含め、検討いただきたい。
- ・道路空間については、既存ストックを活用するという観点から、もっとワイズユースすることで、可能性を持った空間になると思う。例示としては環境への寄与として、風の道や蓄熱をしない道などがある。
- ・事務局案のめざす将来像に、ウォーターフロントのあるべき姿について記述があるが、阪神高速、国道2号のバイパスの撤去といった表現を入れるべきでは。景観の点からもマスタープランで方向性だけでも記述すべき。
- ・ベイシャトルの話よりは、長期的な視点から関西3空港の一体運用にも触れる必要があるのでは。

[委員からの主な意見に対し事務局より行った回答及び補足説明は以下のとおり。]

- ・ウォーターフロントのあるべき姿、地産地消などについては、重要であると認識しており、原案作成にあたって記載内容について十分検討していきたい。
- ・都市計画道路については、都市の骨格となる道路や地域の生活を支える道路として何が必要かを充分吟味し、未着手や事業中の路線を対象に、廃止も含めて見直しをしていきたいと考えている。

- ・ 部会長により、本日の議事に係る質疑応答の終了が告げられ、今後も意見票等により事務局にて意見を受け付ける旨が伝えられた。
- ・ 最後に、事務局より今後の部会の開催日程について、資料に基づき説明を行った。
- ・ 部会長により閉会が告げられ、本会議は終了した。

神戸市 総合基本計画 審議会 第2回 都市空間部会 議事要旨

日時： 平成 21 年 9 月 28 日（月） 13：30～16:00

場所： 市役所 1 号館 14 階 大会議室

出席者：別紙のとおり

【議事要旨】

- ・ 石井副市長、安田部会長の挨拶のあと、事務局より、第 1 回都市空間部会会議要旨（資料 3）、及び都市空間部会審議資料全体構成（資料 4）について説明が行われ、前回議事についての確認、追加の審議等が行われた。
- ・ 安田部会長から議事次第に従い議事に入る旨発言があり、本日の議題である「都市空間部会審議資料」（資料 5）について事務局より順次、説明が行われ、審議された。
（審議内容についての委員意見は以下のとおり。）

【議題：第 1 回議事要旨、審議資料の全体構成】

（海・空・陸の総合的な交通環境の形成）

- ・ 思い切った低炭素物流・交通社会の実現にいち早くとりかかるべき。パーソナルな電気自動車の活用や、思い切って L R T を導入するというような発想で、既存の道路ネットワークを検証しては、「環境にやさしい」だけでなく、神戸が生き残っていく戦略として何が必要かという視点が必要。
- ・ 港での CO₂ 排出量の制限や、燃料への環境税の影響など世界の流れをふまえた上で、これからの神戸港やその周辺道路のあり方について考えておくべき。
- ・ 神戸は、南北のアクセスが弱い。ウォーターフロントを活かすために、新しい電気系の乗り物や、あるいはハーバーランドのあたりへ L R T を乗り入れてつないでいってはどうか。具体的な施策の例を書くのであればそこまで踏み込んでほしい。
- ・ 新しい公共交通機関のあり方について。交通を「人」の移動という視点で見ると、複数の人が毎日通院するより医者が往診すれば CO₂ 排出が半分ですむという発想ができる。交通体系というと車の移動を考えるが、大切なのは「人」の移動であるという視点で、その機能を優先していくことで、ハード面を備えなくても今あるもので対応できるものは多い。

（秩序ある土地利用の誘導）

- ・ 郊外の縮退の問題は、部分的にでも整理して方針を考えておくべき。近い将来、高齢化が進むと、公共負担が非常に大きくなるエリアが出てくる。
- ・ ウォーターフロントのあり方として、産業地域を土地利用的にどう位置づけるか。単に都心のウォーターフロントでいいのか。やはり産業用地は必要な用地であり、暮らしと神戸の特徴的な水辺をどのように考えていくかが課題ではないか。
- ・ まちのゾーンのところで、医療産業都市の育成や H A T 神戸の国際交流機能などについて、機能で位置づけているというイメージが薄い。その地域自体がある種の機能を持つ空間だという打ち出しを意識してはどうか。

【議題：分野別の取り組み】

(3)水と緑を大切にした都市空間の形成、(4)デザイン都市・神戸にふさわしい魅力ある景観の形成、(5)快適な住環境の形成、(6)環境にやさしく持続可能なまちをめざした取り組みの推進、(7)災害などの危機に備えた安全な都市空間の形成】

(水と緑を大切にした都市空間の形成)

- ・ 取り組みの方向性をまち・田園・緑の3つのゾーンに切り分けたことの弊害が出ている。水(河川・海)・公園緑地・森林のあり方を、各ゾーン別の課題として整理したために、これらが環境インフラストラクチャーとしてこれからの都市づくりに重要な視点であるという認識が抜けてしまっているのではないか。具体的には、まちのゾーンでは施設としての川、施設としての公園しか出ておらず、行為としての緑化という視点がない。
- ・ 都市環境の改善のためには、六甲山のもつ冷涼な空気や生物多様性などをまちのゾーンへどうつなぐかということが重要だが、これもゾーン別に区切ったことによって書きづらくなっている。景観のところではうまく整理されつつあるので、水と緑についてもこのような整理が求められるのではないか。
- ・ まちの中の公園や緑化について、震災後、緑化を通じたまちの復興・再生にたくさん取り組まれてきたようなことが抜けている。また、田園あるいはみどりのゾーンは、産業としてよりもむしろ環境としてどう成立させるかという視点がないと維持できない。維持管理という言葉ばかりではなく、どのように皆がその場に関わって使いこなすか、という「しくみ」の部分について、整理して書き込むべきでは。
- ・ 全体像の絵は、骨格をどうつくるか、どうつないでいくかといった視点にたっている。逆に、絵を文章化するアプローチも有効と思われる。
- ・ 夜景を売り出すと言いながら、六甲山のアクセスは現在も非常に悪く、摩耶ロープウエーも老朽化で使えなくなるとも聞く。「みどり」を確保してもアクセスできなくては大きなマイナスで、田園も含めて、現実とあっているのだろうかと思える。

(デザイン都市・神戸にふさわしい魅力ある景観の形成)

- ・ 景観は、集客観光に資する必要があるという観点をに入れておくべき。とりわけ、新神戸～三宮～ポートアイランド～神戸空港の南北軸、ハーバーランドからHAT神戸に至るウォーターフロントの回遊プロムナードについては、整備も含めて言葉だけでもいれておく必要があるのではないか。
- ・ 2(2)「見晴らし型の眺望景観」について、現在の眺望景観の基準はポーアイしおさい公園だと思うが、メリケンパークやハーバーランドのように人が集まる場所からの視点が大事ではないか。どこから見た景観なのかがポイントであり、共通認識をもつことが必要。

(快適な住環境の形成)

- ・ 「住環境」としての捉え方が弱いのでは。今ある住環境の質をどう維持し、管理する仕組みをつくるかは大きな課題。防災やみどりなども総合的に組み合わせられて個々の住環境があるので、住環境の項目の中に記載している方がよいのではないか。
- ・ 人口減少社会をどう踏まえるのかという視点が、住環境の部分にない。特に郊外ニュータウンやスプロールした山麓住宅において、スムーズに縮退できるようなプログラムが必要では。
- ・ 人口密度が下がってきた場合、戸建てが増えるイメージがあるが、逆に、そこに新しい集住のシステムが入ってこないと助け合いのしようがないのではと思う。

- ・ 住環境の項目が単体の住宅・住戸の問題に偏らないよう留意して、わかりやすい表現を。
(低炭素社会を実現する持続可能なまちをめざして)(資料6-1)
 - ・ 1(3)「総合的な交通環境の形成」に、例えば交通需要のマネジメントなど、ソフト的な対策についてもう少し記述すべき。また、料金のマネジメントについても非常に重要な項目なので、考えていくということを記述しておくべき。
- (環境にやさしく持続可能なまちをめざした取り組みの推進)
- ・ 大型客船などが停泊中に陸電という形で電気をとることができれば、CO₂排出抑制に貢献できる。日本の港湾では他にない設備なので、相当の投資は必要と思うが、神戸が先鞭をつけられれば、大いにPRできるのではないかと。
 - ・ 都市基盤の維持管理について1-13(持続可能なまちづくり)、1-14(災害)のどちらにも記述があるが、ひとつの項目としてまとめ、現在のサービスを保つためにどのくらいの手間とコストが必要なかを明確に示してはどうか。
 - ・ 都市で自ら資源やエネルギーをつくり出しているところはなく、神戸もしかり。よそからエネルギーを使わせてもらっていることを、明確に市民に対して説明したうえで、省エネルギーの呼びかけを書くことが重要。
 - ・ 低炭素社会の実現という言葉は出てくるが、具体性に欠ける。例えば1-12の2(2)「環境にやさしい住宅の確保」では、太陽光発電の補助金制度の充実などもう少し具体的に記述できないか。また1-13の2(1)「温室効果ガスの削減に向けた取り組みの推進」でも、例えば家庭版エコマニュアルの普及・実行といったように具体の記述がないと市民には理解しにくいのでは。
 - ・ 2(1)「事業者と行政との協働」とあるが、産業部門ではかなり努力して削減している。運輸・家庭・業務など全般的なところでの推進という表現をお願いしたい。
 - ・ 2(3)に「環境NPO団体や学校との連携による環境教育」とあるが、NPOに限定する必要はあるか。「環境関連団体」のような表現でよいのでは。
 - ・ めざす将来の姿に、エコ製品を普及させるだけでなく、地域特性に合わせて省エネルギー製品をどう使いこなすか、利用に関する戦略を考えていくという項目を入れてはどうか。
 - ・ 2020年の25%削減という大きな流れがこの2~3週間で具体化した。モデル計算では、いろいろ前提はあるが、産業部門は18%削減、それに対して家庭部門は62%削減という数値になっている。暮らしや業務など、いわゆるまちづくりの部門が相当程度頑張れと背中を押されている状態。これを2025年の神戸のマスタープランにどう描くか。
 - ・ 世界中で行われているさまざまな試みを「だれの負担で」「どの地域で」具体化するかが重要。地域で投資するコミュニティビジネスのような仕組みが少しずつ提案されつつある。神戸市はもっとチャレンジブルに、先人たちの知恵を活かしたまちづくりの方向性をぜひ仕組みの面で取り上げてほしい。
 - ・ (6)「環境にやさしく持続可能なまちをめざした取り組みの推進」が、図柄になっていない。ローカーボンシティ、ローカーボンゾーン(LCZ)(「低炭素街区」「低炭素地区」という都市レベルの概念がある。ようやく関西で、いわゆる「オフセット機能付きの開発行為」が実現されるが、このようなLCZの中に、例えば、スマートグリッドの先進的な取り組みや、先ほどの港の通電システムによる二酸化炭素の大幅な削減、消化ガスの発電の試みなどを取り入れ、いわゆる環境インフラの推進ゾーンとして設定するなど含めて、空間に落とししていくという作業ができないか。

- ・ まず街区レベル、地区レベル、まち全体のレベルで描き、最終的には環境的なインフラ自体の顔も見えるものにするような大きな流れを(6) 環境にやさしく持続可能なまちをめざした取り組みの推進 の部分に描けば、ほかとバランスがとれるし、相互に浸透させていくことが可能になる。
- ・ 環境は、個別の仕組みであったり、ハード施設に分断される側面が強いので、神戸市はそういうものを率先してつないでいるという姿を望みたい。
- ・ 25%削減を前提にした取り組み方や方向性を、今この時点で神戸の長期計画に織り込む必要があるかどうかについては、若干の疑問をもっている。
- ・ 環境の面については空間政策としてどう打ち出せるかが重要であり、もう少し最終的な検討を深めていく必要がある。

(災害などの危機に備えた安全な都市空間の形成)

- ・ めざす将来の姿に「災害危険情報の整備充実や共有化」とあるが、災害時はいわゆる協働がなかなかうまくいかない。それぞれがなすべき役割を果たすことが重要となる。例えば行政は情報発信、地域と住民はリスクの認知をすることが役割であり、それぞれ何をすべきかがもっと書き込まれていれば理解しやすい。
- ・ 「減災」の視点が、ハードウェアも含めてなのか、しくみのソフトウェアの話なのか明確にしておくべき。
- ・ 「六甲グリーンベルト」という大きな構想に関して触れられていないが、地主がどんどん変わっていく中で緑を維持していくために、だれが緑を守り、育てるのかを市民の間で共有しておくことが重要となっている。「六甲グリーンベルト」を今後、神戸市としてどのように活用し防災に活かしていくのかといったようなこともあわせて、過去のプロジェクトとの関連について考えてほしい。
- ・ 2(1)「災害発生時に機能する交通ネットワークの確保」において、災害時に港湾を利用するのであれば、移動する貨物量を勘案して、ポートアイランドあるいは六甲アイランドから内陸への道路は現状で十分であるという判断なのか、それとも、新設も考えての確保ということなのか、教えてほしい。

(活力・知力・魅力にあふれるリーディングエリアの創出)

- ・ 兵庫運河やポートアイランドは、例えば物づくりや医療産業が集積したところで集客にはつながらず賑わいを期待しにくい。関西のリーディングエリアと言うのは理想過ぎるように感じる。
- ・ 兵庫運河については、ウォーターフロントの魅力だけではなくものづくりの拠点として、また、もの自体が世界的にも大変すぐれた低炭素商品になっていくという期待も持てる。メガ・リージョンの拠点として打ち出す場合に、即物的な「兵庫運河」という表現ではその包括的なイメージが伝わらないのでは。

(全体構成・表現について)

- ・ 例えばウォーターフロントについては、これまでに他の委員会などでなされてきた議論や検討がどのようにつながっているのか。全体的に感じていることだが、もう少し説明がないと分かりにくい。
- ・ 特に、市民に向けて、一人ひとりが自分に直接関わることだと分かる見せ方をしないと、読んでももらえず、せつかくの取り組みも伝わらない。
- ・ 提案の言葉遣いに主語がないため、例えば、「確保します」も誰が確保するのかが不明確。

- ・ 分かりやすい計画にする方法として、例えば総合計画を骨子だけのシンプルなものとし、具体の施策をある程度部門別計画にゆだねるなどの方法もある。事務局で十分留意して進めること。
- ・ 各区、各地域で環境が違い、皆の思いも違う。地域ごとの中期計画もある。神戸市全体を網羅した一つの方針としては、あまり細かく書きすぎずとも、それぞれの地域性という視点から読んで理解できればよいのではないか。
- ・ まち・田園・緑のゾーン分けが書かれている項目とそうでない項目があるが、ゾーン分けは最初に神戸の特徴的な部分として書いておき、個々に動いているものをうまくつないでいく計画をつくるという趣旨を示すのがよいのではないか。
- ・ 「緑」と「景観」には同じ要素が多い。ひとつの提案だが、景観もひとつの環境基盤であるので、水と緑を含めた環境基盤の視点と、まちづくりの魅力や観光を含めたデザイン都市の視点と、この2つの項目で整理する方法もあるのではないか。
- ・ 都市空間部会では将来のコンセプトを空間像として形にするのが大きな仕事。その意味で最初の全体像の2枚の図面はよいが、分野別の取り組みは図柄になりにくく、厳しい。

(全体的な考え方)

- ・ 基本計画をどういうレベルでまとめようとしているのか。例えば神戸が世界に先進的な環境都市をつくるのかつくらないのかといった大方針をうたうのが基本計画では。どういう政策でどう実行するかまで踏み込んで議論すべきである。
- ・ 資料4「さらに発展させていくまちづくりの取り組み」の(1)から(5)には、産業の観点が抜けているのではないか。こういう構想があるから空間的にはこういう機能が必要という議論がつかない。
- ・ 神戸の経済を支える港湾の役割は大きい。将来も中核的な産業構造として神戸港を守っていくという方針を掲げるかどうかで、神戸港の空間をどうするかの議論は変わってくる。神戸をどういう産業で支えていくのかというようなことが、都市空間を議論するうえで、大前提として必要である。
- ・ めざす何かを目標にして、都市空間部会でどのように押さえていくかを議論していくと、めざすものがどこかでぶつかる。相反するものを並記して矛盾した絵を書くことのないよう、それらをどう解決して乗り越えていくのかを議論する必要がある。
- ・ 産業については、主に活力・魅力部会で議論されているが、並列して動いているため、また異なる都市産業の構造、都市経済自身のあり方の変換という議論もあると思われる。それらが相互に反映されていく中で方向性が定まるものと想定されるので、大前提を必ずしも決めなくてもよいのではないか。
- ・ トレードオフだけが計画でないという面もあり、どうしたら共通の理念を見出せるかという議論が大切。
- ・ 1960年代後半からの都市化に対する神戸市のニュータウン開発などの取り組みはある意味でオープンな取り組みであったといえ、一定の評価をすべき。しかしながら、これからの方向というのはまた違うという意味で、前回のご意見にもあったように、今回の計画ではディフェンシブな方向性の追求も必要であると思う。

[委員からの主な意見に対し事務局より行った回答及び補足説明は以下のとおり。]

- ・ 「低炭素社会に対応した環境にやさしい住宅」の具体的な施策については、長期優良住宅の認

定や太陽光発電システム設置補助などを想定しているが個別に記載をしていないもの。例示がある方が分かりやすいということであれば、表現について検討する。

- ポートアイランドから六甲アイランドの災害時の緊急輸送路については、現在ある道路を中心にその機能向上を図るという考え方になっている。一方で、大阪湾岸道路のような新たな道路についても緊急路としての位置づけをしていくことになる。

以上

日時：平成21年10月29日（木）15：00～17：30

場所：三宮研修センター 5階 505会議室

出席者：安田部会長ほか委員16名

【議事要旨】

- ・事務局より、第2回都市空間部会会議要旨（資料2）、前回議事についての確認等が行われた。
- ・安田部会長から議事次第に従い議事に入る旨発言があり、本日の議題である「都市空間部会審議資料」（資料4）などについて事務局より順次、説明が行われ、審議された。

（審議内容についての委員意見は以下のとおり。）

議題：3 地域が主体的に取り組む地域環境をつくる

(1)密集市街地 (2)成熟したニュータウン (3)田園地域

(1)密集市街地

- ・課題のところには山麓斜面地が課題とあるが、取り組みの方向性のところにはその記述がない。図面にも入っていないようだが、理由は何か。

(2)成熟したニュータウン

- ・「空き店舗などを活用した交流・活動の場の確保を支援」とあるが、空間部会での議論ではこの記述になるかもしれないが、商業機能として、空き店舗に対して、中長期的な観点からの記述が必要と思う。空間部会ではハード中心の記述になっているが、ソフト面も含めてまとめてほしい。また、どういう人材がそこをどのように使っていくのかについても触れてほしい。
- ・ここの全体のタイトルが地域主体となっており、エリアマネジメントが根付いていることを前提に、取り組みの方向性を記載したほうが良いのではないか。
- ・田園地域のところで自主運行バスなどの取り組みへの支援とあるが、田園地域に限らず、ニュータウンなど、通常のバス路線の対応が難しいところではどこでも必要になるのでは。
- ・地域コミュニティの強化、参加の機会の創出、人材のネットワークなどの記載があるが、どういう人たちを想定しているのか。若い人でなく、ヤングオールドというか、退職した団塊の世代の人たちが地域を変えてくれると思うし、ノウハウももっておられる。今回の計画では、そういう人たちに主体になってもらいたいので、参加の機会を創出し、そのための施設をつくるなどターゲットを具体的に絞った方がよいのではないか。
- ・めざす将来の姿には、明るいニュータウンのイメージがあるが、介護の経験からは、介護していく施設がなく、これまで培ってきたコミュニティから切り離された場所に行かざるを得なかった。そういう局面を打開するプランにしていきたい。
- ・成熟したニュータウンに住んでいるが、めざす将来の姿はまさにそのとおりだと思う。それは普遍的なまちの姿でもある。年を召された方を弱い人と捉えず、どうまちづくりに力を貸していただくか、という視点の記載が必要では。

- ・ まちづくり学校で、「自律と持続」をテーマに、成熟したニュータウンのひとつであるひよどり台のまち歩きをおこなった。60代、70代の方を中心にまちづくりに活発に取り組まれている。自律という意味でも、行政サービスをどうするかだけに記述が偏っては問題がある。
- ・ フィンランドのタピオラは歴史あるニュータウンとして有名だが、地区センターに墓地を入れるという大きな土地利用転換を行っている。宗教的なバックグラウンドは異なるが、このような転換も重要な視点であろう。

(3)田園地域

- ・ 地域による田園景観の取り組みへの支援との記載があるが、まず都市近郊農業としての充実策があるべきで、農業の活性化に対応して良好な景観が生まれてくるのではないかと。いかに田園地域を活性化していくかが重要である。
- ・ 今後、農業がより多様化することが想定され、田園環境についても市街地と同じようなコントロールが求められている。
- ・ 農業のあり方についてだが、空間部会では現在示されている地域の範囲で、ものを考えようとしているのか伺いたい。議論を進めるにあたって、現在の図の地域の範囲に限定しないということも頭においておくべきではないか。
- ・ 例えば、神戸の農業は一步踏み出して、会社方式で進めることも考えていくのかどうか。その進め方をするとすると、都市空間上の対応も必要になってくる。
- ・ 田園地域の記述が地域による〇〇への支援となると市が一步引いたような記載になるが、よいのか。
- ・ 農業のあり方は活力・魅力部会にも深く関係するが、土地利用の問題として考えていくところでもある。
- ・ 地域が主体的に取り組むということでは、里づくり協議会などで自ら土地利用を考えるような取り組みにもふれておくべきではないか。

全般・記載の工夫について

- ・ 3（地域が主体的に地域環境をつくる）のめざす将来の姿には、何のためにという目的の部分が書かれておらず、方法論が記載されている。取り組みの背景を記載しておいたほうがよい。
- ・ 3（地域が主体的に地域環境をつくる）はむしろしくみを書く書き方だと思う。課題はこれまでのしくみを検証した結果であるべきだが、書き方には研究を要する。
- ・ めざす将来の姿では、〇〇を通じて、という方法論が強調された感じがする。記載方法に工夫が必要では。

[委員からの主な意見に対し事務局より行った回答及び補足説明は以下のとおり。]

- ・ 山麓斜面地について、課題として認識している。今回の説明図面は、現在取り組みを行っているところを記載したもので、山麓を含む密集市街地については取り組みの範囲の検討を行っているところであり、現段階では全てを図面に落とせていない。
- ・ 農業地域の範囲について、市街化区域については、基本的にはその範囲を拡大しない方向でまちづくりに取り組もうとしており、田園ゾーンについても、基本的にその範囲で活性化をと考えている。

- ・ ○○を支援するという記述について、文章では、主語を省略して主体（行政）を表現しようとするとしてもこのような記述になってしまうが、今回の基本計画は協働計画と考えており、行政がこれはここまでしかやらないということではなく、一緒にやりましょうという考えである。表現の工夫については、検討していく。

議題：4 活力・知力・魅力にあふれるリーディングエリアの創出

(1)都心・ウォーターフロント (2)ポートアイランド (3)兵庫運河 (4)六甲山・有馬

(1)都心・ウォーターフロント

- ・ 東灘区でも現在、区の計画づくりに取り組んでいるが、ワークショップでは水上バスを西宮浜～芦屋浜～東灘～中央まで通すという案が非常に人気を得た。都心ウォーターフロントの検討にも隣接する都市との関係をもっと意識してもよいのではないか。
- ・ 水上バスについては、結局採算性で残念ながら撤退するという状態が続いている。あったらいいなどのイメージは湧くが、実際に利用するということまでいくかが問題。
- ・ 言葉の使い方についてですが、新港突堤もすでに新港ではない。どこかの時点で名前を変えていくというのが大事では。
- ・ リーディングエリアが3箇所だが、海沿いというともっと広く、舞子、須磨海岸もあるのに、なぜ兵庫運河で切られているのかと思う。
- ・ 旧居留地の景観がひとつ奪われ残念に思うことがあった。15番館の東西の道が非常に好きな景観だったが、東西両方の視点の先にマンションが立ち、空が奪われた感じだ。
- ・ 都心・ウォーターフロントに箱物ができるなら、夜間景観を大切にしたい取り組みを期待したい。例えば香港のシンフォニー・オブ・ライツを意識してもらいたい。
- ・ 都心・ウォーターフロントも大きな方向性として考えるのであれば、個別のプロジェクトが止まっている時期にきちんと全体のプランをまとめ、個々の建築をきちんと誘導していくべきと考える。
- ・ 元町も都心にあるが、駅周辺の整備が不十分である。南京町というシンボルをいかし、三宮や港と一体となって、グレードアップする取り組みを打ち出してほしい。
- ・ 昔とは船の数がぜんぜん違う。以前は港に活気があり、ワクワクする感じがした。今は活気が少なくなったが、神戸港をどのようにアピールするかを考えるべき。
- ・ 都心とウォーターフロントが一体化しても世界に発信できないと思う。世界レベルのものが少ない。明石海峡大橋は世界一長いつり橋として、海外にもアピールできる。
- ・ 須磨のヨットハーバーは大きなヨットが止められない。空港島付近にはヨットが寄れない。神戸のよさは水面にもあり、トータルでデザインする必要がある。
- ・ リーディングエリアとしてはもう少し別の視点もいるのではないかな。
- ・ ウォーターフロントについて何を重点におくのか。須磨、舞子、明石海峡大橋を含めて考えていただきたい。
- ・ ウォーターフロント研究会ができて期待していた。みなとまちのグランドデザインが必要と感じている。シドニーのオペラハウスやアメリカの東海岸の都市などは非常に美しい。神戸も海と山を売りにした戦略を考えていくべき。

(2)ポートアイランド

- ・ ポートアイランドの生活関連施設の不足が課題として上げられる。欠けている機能をどう補足するのかについて、具体的には部門別計画かもしれないが、少しは書き残しておかないとどこにもないのでは困る。
- ・ ポートアイランドの部分の記述は 2 期を意識した記述となっているが、1 期の部分の問題も大きい。ファッションタウンも衰退の兆しが見られる。大学もできたが、学生と交流できる場所も銀行もない。これらのことは官民が一緒に考えていく問題だ。
- ・ ポートピア博覧会のときは、日本中からすごい人がやってきた。21 世紀を先取りした未来型の都市と思ってきた。今の状況はどうか。第 1 回 部会でも反省することも必要との意見をいったが、計画的につくってきたまちの実態を検証し、次に活かすことが重要では。2 期の取り組みも 1 期の反省を踏まえた計画とすべき。

(3)兵庫運河

- ・ 観光タクシーで鉄人 28 号の観光ルートを考えて。ひとつは目をならず意味で、兵庫大仏を見ていただき、そこまで行けば、川崎重工の車両工場ということになる。そこではゼロ系新幹線もみることができる。兵庫津は全国区ではないが、ゼロ系新幹線は全国区。魅力あふれる空間は全国区で勝負していく必要がある。
- ・ 兵庫運河は、大変価値のあるところだと思う。しかし兵庫運河と書くと運河だけになるので、運河周辺も含んだエリアとしていただきたい。川崎重工、三菱造船、大輪田泊などは全国区。兵庫運河もシビルエンジニアリングとして優れた資産。
- ・ 最近訪れた碓氷峠の橋などではシビルエンジニアリングとして、先人の偉業を感じた。そういったものに市民が誇りをもち、まちを自慢したくなる。神戸にも土木遺産も数多くあり、観光資源になっていくと思う。
- ・ 三菱、川崎などの企業にどう参画してもらうか。企業の取り組みはもっと市民に見せることが必要だと思う。川崎は日本のみならず、世界の車両を作っている。もっと企業にもまちづくりに参画してもらう必要があるのでは。すばらしい産業の財産である。

(4)六甲山・有馬

- ・ 六甲山から見える景色は非常に美しいが、今は 120° の視界を確保できる場所も少ない。夢のような話だが、例えばハーブ園⇒摩耶ロープウェイ 星の駅⇒六甲山上と横につなぐロープウェイがあると面白いと思う。
- ・ 「六甲山はきれいな空気が吸える場所として車を排除しては」と以前提案して怒られたこともあったが、低炭素社会をめざすなら大胆にそのような取り組みをしてもよいのでは。
- ・ 六甲山は神戸にとって大きな意味を持っている。神戸は一人当たりの公園面積の大きいまちだが、それに六甲山を加える考え方をさらにもつ必要がある。観光地の側面だけでなく、市民がきれいな空気が吸えるという部分も大事。

リーディングエリア全般

- ・ リーディングエリアについては、地域をネットワークしていくという考え方も必要では。かつて設定していた酒蔵や六甲有馬などの観光群という位置づけは、今回はどう扱うのか。

- ・ 現在は場所が先にあるが、今後の整理では、テーマを追う中で空間とつながり、場所が現れてくるという整理もあり得る。

全体

- ・ 芦屋、西宮と連携がうまくとれていない。東京の人から見ると神戸は広く、芦屋、西宮も神戸、明石、加古川も神戸と思っている人も多い。
- ・ 阪神間の住宅地といったときに隣の芦屋の存在もあり神戸も美しいといわれる。デザイン都市の取り組みも神戸だけでよいのかと感じている。
- ・ こちらに越して来た頃に、「神戸に住む」と友人に言うと言われたが、「須磨よ」と言うとそのイメージも良かった。西の方も含めて、全体的な感覚をもつことも大切である。
- ・ 団塊の世代の方が、地域のために活躍するのは重要だが難しい面も多いので、その手立てについて記述しておく必要がある。板宿など本当に懸命に取り組まれているが、どの地域でそのような取り組みがあるかについて把握できるようなデータというものはあるのか。
- ・ 道路・交通体系については周辺地域まで含まれているが、他の議論はポイントごとになっている。海と山のまちとして、運河だけでなくすべての水面をどう活用するかという視点が重要。

[委員からの主な意見に対し事務局より行った回答及び補足説明は以下のとおり。]

- ・ ポートアイランドのご指摘の点については、課題として認識している。庁内でも議論を深めたいと考えている。
- ・ 観光群については、前計画では観光など個々の拠点についてふれているが、今回の資料では全体像として大きな流れで整理しているため、ふれていない。
- ・ 地域力を測るデータの有無についてご質問ですが、調べてみたいと思います。

以上

神戸市総合基本計画審議 第1回市民生活部会 議事要旨

日時：平成21年9月22日（火・祝） 14：00～16：30

場所：三宮研修センター 5階 505号室

出席委員：牧里副部長ほか委員25名

【議事要旨】

- ・ 梶本副市長、牧里副部長の挨拶のあと、事務局より、第1回総会会議資料（資料3）について説明があった。
- ・ 牧里副部長から議事次第に入る旨発言があり、本日の議題である市民生活部会における審議資料等について（資料4～5）、事務局より順次、説明が行われ、審議された。

（審議内容についての委員意見は以下のとおり。）

【議題：市民生活部会の検討の全体像】

（昨年度の市民ワークショップ（WS）について）

- ・ WSの結果、特に「家庭・地域・学校で、他人を思いやる心やマナー・モラルが低下する」「地域への参加や助け合いが難しくなる」「行政に対する市民の信頼が低下する」の3点が根幹であり、ここに手を打てば不安を取り除けるのではないかということが見えてきた。
- ・ 「安全・安心」について、市民生活部会の資料では、防災や防犯が「安全」で、健康や医療や消費生活が「安心」というように2つに分けられているような印象があるが、WSでは安全と安心はセットで、安全は客観的なもの、安心は主観的なものととらえている。

（全体のまとめ方について）

- ・ WSの結果はかなり危機感を煽るものとなっているが、それを受けた全体のまとめ方を見ると、そうした危機感がずいぶん後退している印象を受ける。
- ・ 市がやっている施策が中心になっているが、協働の計画なのだから、事業者・市民の取り組みについても記載すべき。
- ・ それぞれの項目について、行政がするもの、地域がするもの、協働でするものという3分類があると思うが、それが分かりにくい。全体を通じて協働があり、最後にそれが地域コミュニティに流れ込むというような形がよいと思う。「協働と参画」はすべての章に関係することであり、しっかり整理してほしい。

（「市民生活の特色・強み」について）

- ・ 神戸の強みとして「救急医療など医療体制の充実」が挙げられているが、医師不足や、診療科目による医師の偏在などの問題があり、救急医療については市民病院群の穴をカバーする民間の二次救急医療体制もかなり疲弊するなど、救急医療の充実度は下がってきていることを認識してほしい。少子化が進む中、子どもは国の宝であり、小児医療の体制の充実が重要である。また新型インフルエンザに関しては、肺炎を起こした患者に人工呼吸器を使うことで他の手術に支障が出るなどの課題が懸念される。
- ・ 「特色・強み」といっても、たとえば「子育て・教育」など個別の項目を見ると、児童館の配置が中学校区単位で学童保育が過密状態にあることや、中学生の学力の問題など、厳しい部分もあるのではないかと思う。

【議題:暮らしに安全と安心をもたらす】

(消費者問題について)

- ・ 相談体制の充実など、法律・経済的な部分が主眼になっているようだが、検査体制など科学的な部分も重要であり、神戸にもしっかりした検査機関の設置が将来必要である。国の「消費者庁」が立ち上がった今が、近畿全体の検査体制をつくり、神戸が安全・安心の基地になるチャンスである。
- ・ 事業者が検査体制を整えるのは限界があり、市が国と連携して食品やくらしの安全・安心を構築していくシステムが必要であると思う。
- ・ 消費者問題については、衣食住すべてを対象にするというニュアンスにすべきで、特に一番大きな財産である「住宅」も含めることが必要と思う。住宅の手抜きや不法建築などの問題に対して、検査体制が実態として十分追いついていない。たとえば京都府では、建築士会が中古住宅の性能評価をする準備を進めるなど、民間主導の取り組みも行われている。

(防災・防犯について)

- ・ 地域での防災活動にあたっては、民生委員や自治会、ボランティアなどが役割分担して、高齢者や障害者の避難訓練等を区役所と一緒にやるなど、力を合わせて行っている。救急救命のインストラクターを、消防と連携して増やしていく取り組みも行っている。
- ・ 震災教訓の継承・発信は大切な視点だが、中身の記述は行政がやっていることばかりになっている印象がある。10年前に集集(チーチー)地震が起きた台湾の桃米(タオミン)では、野田北の復興まちづくりのメンバーが、ペーパードームを移設するなど熱心に交流している。このように発信と交流の視点が大切であり、民間の方の熱心な交流活動をもっと拾ってほしい。
- ・ 発信というと神戸だけが全部を知っていてそれを他に教えるというイメージがあるが、それは驕りであって、災害は1つずつ様相が異なる。他国の復興から日本が教わることもある。
- ・ 防犯についてはわずかしか記述がないが、ひったくりや空き巣が急増するなど防犯の課題は多い。ネガティブであっても事実はきっちり押さえて、その上で施策を考えるべき。
- ・ 防犯は、どの地域でも行っている最も基本的な取り組みだと思う。
- ・ 防犯については、日本は世界で一番安全という評判だったのが崩れてきている。市の管轄ではないかもしれないが、警察官を減らさないよう、県に働き掛けてほしい。

(健康・医療について)

- ・ 健康づくりについては、身体的な健康のみで、心の健康が抜けている。仕事を持たない20歳代の若者が増え、その多くがメンタルの問題を抱えるなど、劇的に外的環境が変わっており、ゼロから見直しが必要なのではないか。
- ・ 心の問題の記述が薄い。高齢化が進み、引きこもり予防の必要性が高まるが、具体策が乏しい。
- ・ ソーシャルエクスクルージョンの問題は、日本的な課題としては、「都市型限界集落」、つまり職や行き場がなくて引きこもってしまうという形であられることもある。行政だけでは対応できず、専門職や事業者や市民グループなどの取り組みが重要になる。
- ・ 自殺者の数は全国で3万人以上で、メンタルヘルスは大切である。引きこもっている人を地域で少しでも救いあげたら自殺者の数も少なくなると思う。
- ・ インフルエンザ予防にあたっては、教育委員会との関係が大事だと思う。
- ・ 中央市民病院の役割は高度専門医療だけでなく一般医療、救急医療が重要であり、西市民病院、西神戸医療センターをあわせた3病院連携による救急医療体制が求められる。中央市民病院は移転に伴って病床数が減るが、本当に足りるのか、柔軟に考えてほしい。

(障害者の社会参加について)

- ・ 障害者の議論の中で、どうしても障害＝弱者ということになりがちだが、ICT を使えば弱者でなくなることもある。弱者を弱者でなくすプロセスを福祉と呼びたい。
- ・ 神戸は先進的な街だが、ICT の面ではまだ弱く、ホームページにも改善の余地がある。
- ・ 地上デジタル放送の普及により、個別の人にピンポイントの災害危険情報を送ることも可能になった。ICT の活用は、障害者も高齢者も子どもも主体的に参画してお互いの助け合いの発信ができるものであり、すべてのベースに使えるものだと思う。
- ・ 障害者が暮らせる地域づくりを進めるため、地域自立支援協議会を各区に立ち上げ、障害者の支援活動が行われている。ただ、施設の建設には、総論賛成・各論反対が多く、障害者を知らないために怖いというイメージを持っている人が多い。地域の理解を得るため、行政にも協力してほしい。

【議題: 自律的な地域コミュニティをつくる】

(コミュニティの活動範囲について)

- ・ 自主防災組織の結成率について、小学校区単位だと 90%近い数字はすぐに出るが、単位自治会レベルだと途端に 60-70%程度に下がる。次のステップでは単位自治会レベルで防災の知恵・知識が継承されていくような仕組みが必要と思う。
- ・ 小学校区という地域が大きくなりすぎていないかと思う。小学校とふれまち協などの地域団体の連携は、うまくいっているところとそうでないところがはっきりしている。どの範囲を地域ととらえるかは場所によって違う。お互いの話し合いが必要と思う。
- ・ 小学校区というのは、1年生がランドセルを背負って通える範囲であり、お年寄りでも杖をつきながらも移動できるので、防災活動はできているのではないか。小さく割りすぎるとリーダーが大勢になって、誰の言うことを聞けばよいのか分からなくなるのが心配だ。
- ・ ニュータウンのように計画的につくられたまちでは、小学校区がそのままコミュニティの単位になることもあるが、一方で野田北などは校区が須磨区と長田区に分断されている。住民自身が自分たちのまちと感じられる範囲を基本に考える必要がある。
- ・ コミュニティの範囲は小学校区を最大限として、それ以上大きくはしないこと。大きくなり過ぎると官僚的なシステムになり、うまく機能しなくなる。
- ・ 行政主導で「コミュニティをここからここまでくくって作りなさい」などというのは本末転倒であって、決してしてはならない。

(コミュニティづくりのあり方について)

- ・ 地域の中には小学校区ごとに、地域福祉センターがあり、地域の福祉活動の半分ぐらいはここでできているのではないかと思う。たとえば高齢者同士が助け合う福祉銀行の試みなどを通じて、安全・安心をつくっている。市はセンターの所有者として、利用者のマナー向上等と呼び掛けてもらったら、地域のレベルが全体で少し上がると思う。
- ・ ふれまち協には大いに期待しているが、様々な目的に応じた「重ねあわせのコミュニティ」を提唱したい。ふれまち協オンリーということではなく、商店街や市場のつながりなど、生活の中で無理なくつながることができる枠組みを柔軟に考えてもらえればと思う。
- ・ さまざまなコミュニティを重ねあわせて重層的なコミュニティをつくっていくことは、神戸はやりやすいのではないか。外国人コミュニティ、地域コミュニティ、障害者コミュニティなど、いろいろ重ねあわせたコミュニティのあり方を全国に発信するような、大きな戦略を描いてほしい。

- ・ ふれまち協はよい仕組みだが、そもそものミッションは地域福祉を推進するというものであって、必ずしも地域力を高めるという仕組みではない。地域自身がガバナンスできるようにしていくような、多様な地域の代表者、関係者が、テーマ型のコミュニティもかかわったような形でもう一度作り直すと言うのも一つの考え方であり、そのあたりの議論をするべきではないかと思う。
- ・ 地域での高齢者や障害者の見守りについて、震災後に「見守り会議」というものができ、当事者・近隣住民・行政等が入り、取り組むべき事柄や優先順位などを話し合ったが、いつの間にか無くなった。段階的にこうした会議を各地域に作ってもらえないか。引きこもり高齢者の発見にも繋がる。
- ・ 自律的な地域コミュニティづくりが、ボランティア頼みでいつまでやっていけるか。仕事として公共サービスを担うようなコミュニティがこれから必要だ。そうしないと永続的に続かず息切れしてしまう。これからはボランティアとは違った接点が必要になると思う。
- ・ 市民主権や地域分権についての記述が弱く感じる。
- ・ 横断的連携によるコミュニティづくりの実現のため、庁内での窓口設置や、区別プラットホームの設置など、具体的に踏み込んだ施策で、経済的にも自立度の高いコミュニティをつくってほしい。
- ・ 地域の実情に応じた地域活動支援について、もっと書きこんでほしい。
- ・ 外国人対応や救命士育成、医療機関との連携、災害時要援護者対策、消費者問題への対応など、すべて取り組めるようなコミュニティをイメージしている。今のように縦割り団体でばらばらで、力が分散する、後継者の育成がしにくいという状態を何とか克服できないかということが、ここで議論されるべきことと思う。
- ・ 小学校では、「のびのび広場」でボランティアが子どもたちに折り紙や囲碁を教えるなどの交流を行っている。
- ・ 子どもと高齢者が顔みしりになるなど、人と人との関係性がしっかりできてくると、安全・安心につながる。子どもが健全に育つためには、行政も学校も大切だろうが、家庭が一番大切である。

(外国人も含めたコミュニティづくりについて)

- ・ 中央区は外国人が多く、ゴミ出しなどに関する市の施策が伝わらないことがある。ぜひ在住外国人の意識調査をして、地域の実情に応じた地域活動ができるようなコミュニティをつくりたい。
- ・ いわゆるソーシャルエクスクルージョン（社会的排除）の議論の出発点は移民排斥の問題であり、在住外国人への対応は重要な視点と思う。
- ・ 外国人コミュニティと言っても、かなり小さくバラバラであり、いろいろな国の人がいて、ニーズもそれぞれ異なる。
- ・ 兵庫県・神戸市は外国人のためのディスカッショングループを作るなどしてくれており、数カ国語のパンフレット作成等も含め、外国人のためにこれほど対応してくれる国はないと思う。

意見用紙による委員追加意見について

●大森委員の意見

- ・安全・安心のためにはDVを重要だと考えます。どこかに盛り込んでいただければと思います。

●中川委員の意見

- ・各章ごとに、協働と参画の理念を具現化する市民（団体）の役割、行政の役割、協働の課題を明記するべきでしょう。
- ・コミュニティのところで、社会教育、学校教育の役割が抜けているように思います。

神戸市総合基本計画審議会 第2回市民生活部会 議事要旨

日時：平成21年10月7日（水） 14：00～16：00

場所：三宮研修センター 7階 705号室

出席委員：松原部会長ほか委員16名

【議事要旨】

- ・ 松原部会長の挨拶のあと、事務局より、前回議事についての確認が行われた。
- ・ 松原部会長から議事次第に従い議事に入る旨発言があり、本日の議題である審議資料（資料4及び5）について事務局より順次、説明が行われ、審議された。

（審議内容についての委員意見は以下のとおり。）

【議題：前回議事についての確認】

前回議事については、承認

【議題：子育てを家族と社会全体でささえる】

（少子化について）

- ・ 少子化の原因は、晩婚・非婚だけでなく、子どもが苦手であるとか、経済上の問題、将来の心配、あるいは個人の生き方として、子どもが欲しくないという人が増えていると思う。
- ・ 今は子どもについて学ぶ機会が失われ、子どもを産み育てる自信、“育児性”（子ども、子育てに対する肯定的な感情や意識）が持てなくなっている。
小学校高学年から中学までぐらいで、子どものかわいさが伝わり、かまってやりたいという気持ちや育つようなふれあいを増やしてほしい。また、親子や異性に関する踏み込んだ学習の場づくりも必要であると思う。
- ・ 子どもが欲しくても持てない人もいる。不妊治療について、公的助成など、社会全体で理解を深めてほしい。

（地域子育て支援について）

- ・ 児童館やサークル、ファミリー・サポート・センターなどの地域の子育て支援について、もう少し定期的に、実際に子育て中の人の意見を聞くなどして、施策の改善を図ってほしい。
- ・ 地域で子どもを育てるとするのは、保育所や幼稚園など各施設が地域ボランティアを積極的に導入するなどしないと難しい。子どもを対象にした犯罪などがあり、保育所や幼稚園は部外者が入れないように囲われている感じがする。
- ・ 様々な世代の人材確保が大事で、シニアの力は大きい。地域デビューのきっかけづくりや、情報が皆さんに届く仕組みづくりを進めてほしい。
- ・ 地域で育てる中で、「預かりたい」「預けたい」ということはどうしても出てくる。事件や事故等の問題はあがるが、もっと大らかな社会環境をつくっていききたい。

（家庭・家族、社会規範等について）

- ・ 家族、家庭を社会がどう支えるかが重要。ワーク・ライフ・バランスもそうだが、本来、子育ての中心は家庭であって、責任ある保護者が家で育てるのがベストと思う。子育て支援の制度が充実することが、親・保護者が見ない時間が長くなってしまうと、本末転倒しないか。

- ・しつけのあり方を考えるべきであり、社会規範を学ぶことも大切と思う。
- ・子育ての基本は家庭であり、PTAでは「親学」に取り組んでいる。私たち親が変わらなければ、環境を変えることはできないのではないか。あまりにも支援施策に頼りすぎて本当に自分たちがすべきことを見失っているのではないかということをもみんなで考えている。
- ・子どもは親や先生の姿を見ながら、場の中で成長していく。幼児期の中で、親と生活をともにする時間が長ければ、親のアイデンティティや思想性、価値観、規範意識などを知らず知らず獲得していく。低年齢のときに保育所に長時間預けて、親があまり介在しない時間が増えていくということが本当にいいのかどうか。
- ・子育て支援の中で、不満要因をどんどん取り除いていくという施策が多いが、ストレスの軽減にはなっても、親として子育てに関する満足、充実感は感じられないのではないか。
- ・しつけは、相手に不快感を与えないマナーを学ぶことであって、しつけがきちっとされていないと、成長すればするほど、対人関係がうまく図れないということが出てくる。地域の中での関係性、絆を強め、地域の中で育てていくということが大切。

(保育所・幼稚園等について)

- ・保育所入所について、4月から仕事が決まっても、3月まで保育所に入れるかどうか分からないようでは女性が正社員として働くのは難しい。延長保育や土日祝日の保育も必須だと思う。
- ・3歳未満の子供を持つ母親の在宅率が非常に高いようだが、働きたいのに働けないのかどうか背景のさらなる分析が必要と思う。
- ・子育ての施策体系は厚生労働省と文部科学省の縦割りが強く、幼稚園などとNPO、地域とが話し合う機会もない。各種団体のネットワークによる経験や課題の共有化に力を入れてほしい。
- ・保育園に比べて幼稚園は公的補助が少ない。認定こども園などの施策が具体的には出てきているが、実際には幼稚園から認定こども園になろうと思ったら、非常にハードルが高い。

(障害児施策について)

- ・将来、子どもたちが住みなれた地域で暮らすという視点に立って考えたときに、障害者が地域の方々に慣れてもらうということが大切である。施設という限られた世界だけでなく、地域で、小さいときからまわりの子どもたちと一緒に育ち、将来、地域で皆さん方に守られ、できないところを支援されながら、グループホームやケアホームで暮らすという形を目指したい。
- ・発達障害の子どもたちが、それぞれ自分たちの能力を伸ばしていくという部分では、個別指導なども大事だと思うが、やはり社会の中で育てるという部分が重要である。
- ・自分の子どもが、発達障害も含めて、障害があるということを受け入れることにかなり時間がかかると思う。そういう中では、発達障害支援にまだ足を運ばないという親御さんも多いので、子育て支援全体の中で育てていくという施策も必要だと思う。
- ・発達障害支援について、相談窓口になる方の専門性がとても必要になってくると思う。児童館などについても、窓口の方々の専門性の向上が急務ということを入れてほしい。

(「めざす将来の姿」について)

- ・書かれていることに何の異論をはさむ気持ちはないが、どんな人に育てたいか、どういう人にその人らしく神戸に貢献してほしいかというところが欠けていないか。人をどのように育てていくかという理念というものをここに織り込む必要があるのではないか。

- ・組織の構成の人間の一番大事な部分は、組織に対する感謝の念といったものが一番ベースになる。それは実は家庭でしか芽が植え込めないものである。また、感謝の念の上に誇りというものがある。それが当然ついてくる。地域や国、自分に対する誇りなどの理念を大事にしていかなければいけないのではないか。
- ・今後議論をまとめていくときには、「めざす将来の姿」の事務局仮案で示されているようなことが実際とはどれだけ乖離しているか、それをこれに近づけるようにするためにはどういう提案をしたらいいのかということをもとめていくとよい。
- ・どんな状態が子どもの目線に立って望ましいのかという基準、そして、ひいてはその延長線上の大人像ということに関して、例えば、子供の権利条約を国も批准しているので、そこで描かれている子どものあるべき姿が、どの程度まで今の施策の中で対応できているのか、何が課題なのかを見ていくということは、ある種の子ども像をグローバルスタンダードに照らし合わせて、神戸はどの辺りにあるのかということをチェックしていくという意味で、客観性の担保がある手だての一つかもしれない。

(その他の子育て支援策等について)

- ・妊婦健診について、保険が適用できるようにしてほしい。
- ・母子家庭への支援事業は多いが、最近増えてきている父子家庭への支援が抜けているのではないか。
- ・新生児訪問の中でマタニティブルーになられた方を一早く発見し、専門的なサポートをして虐待が減少した市もあり、そうした取り組みも必要である。
- ・病児・病後児の部分が余り具体化できていないのではないか。「病児・病後児サポートネットワーク事業」というところに神戸市は入っていない。ファミリー・サポート・センターでは対応困難であったので、やはり専門職をうまく活用されることも必要ではないかと思う。
- ・市内企業に両親がパートタイムで働きつつ一定の収入を維持する制度づくりのような取り組みを頼むなど、社会構造にかかわる違う観点からの働きかけがあってもよいのではないか。
- ・事業所の中には、福利厚生で時間と費用の保障をされていて、それは介護に使ってもいいし、育児にも使ってもいいという事業所もあると聞いているので、そこも少し進めてみてはどうか。
- ・神戸市内にひとり親家庭はどれくらいあるか、支援が必要な人に届いているかなどの課題がある。毎日の生活に追われている人の意見や経験を聞く機会をつくってほしい。

【議題：ともにささえあう社会をめざす】

(外国人への対応について)

- ・外国人籍市民に対する視点を織り込む必要がある。その際には、外国市民の文化性への理解を広めて、深めていくことが必要である。また、地域の外国籍市民のコミュニティやNPOとの連携や共助を進めるなど、外国籍市民へのサポートを一層推し進めていくことが必要である。
- ・各区役所での電話通訳事業について、試験的に始まった同行通訳システムをさらに一歩発展させ、区役所窓口に通訳者を常駐させていただくことも検討していただきたい。

(障害者対策について)

- ・20年ぐらい前にアメリカの人たちが、障害者について「ハンディキャプト」とか、「ディスエ

イブル・パーソン」というネガティブな呼び方をやめようということで、いろいろな言葉を生み出した中の一つが、挑戦という使命やチャンスを与えられた人であるとか、人にはすべて自分の課題に向き合う力が与えられているという理念を盛り込んだ「チャレンジド」という言葉である。

- ・「ともにめざす将来の姿」に、「健やかに安心して尊厳をもって生活し続ける社会をめざす」とある。家族からも周囲からも必要とされることが尊厳の第一歩であり、持てる力が尊ばれて、はじめてその力が発揮できる、そして尊厳をもって生きられるのだというのを入れることで、一方的にささえるだけでなく「ともにささえあう」という大きなタイトルにつながる。
- ・一人ひとりの人間の持っている可能性にどのような形で光を当てていくか。市民と事業者と行政が互いに協働でそういう条件づくりができるか、そのためには何をすべきかというのをこの計画で書き込む必要がある。
- ・障害者に対して、今、まだ日本の国は批准をしていないが、障害者権利条約が国連で採択をされている。そういった一つのグローバルスタンダードみたいなところから、神戸市として、障害者にとって一番生活しやすい、安心して暮らしていける、尊厳を持って暮らしていける、そういった社会をどうやってつくっていくのか、そういった視点をどこかに入れていただきたい。

(高齢者の扱いについて)

- ・「高齢者・障害者」と、ひとくくりの形で書かれている。当然似通ったサポートをしなければいけない部分もあると思うが、本当は少し違った視点からの整理が必要であると思う。高齢者の中にも、支援を必要とする人とそうでない人がいて、さらに、支援を必要とする人たちの中にも、チャレンジしている高齢者もいる。その辺りの差をきちんと分けて考えていく必要があるのではないか。
- ・後期高齢者を対象にした介護保険に関するアンケートを実施されていると思うが、それを整理すると、同じ後期高齢者の中でも神戸市内でどれだけの人が介護を必要としていて、どれだけの人が後期高齢者の中でも介護も何も必要ないかという区別ができるのではないかと。

(その他)

- ・ワーク・ライフ・バランスがどのように進められているのか知りたい。
- ・東灘での先進的な徘徊老人のSOSネットワークのモデル事業をしっかりと踏まえた上で、きちんとしたビジョンを出してほしい。
- ・神戸のこの地で、これが主にこれから先大事になるだろうという視点が余り見えてこない。
- ・「ともにささえあう社会をめざす」という言葉は非常にきれいであり、将来的には、ある程度行政はしっかりして、さらに足らずを補うような形で任意団体なりNPOがそれをささえあうというという形が本来であることはよく分かるが、今のこの神戸の地で果たして既にそういう状況になっているのかどうか、少し自信がない。

意見用紙による委員追加意見について

○大森綾子委員（兵庫県看護協会会長）

- ・ 4 ともにささえあう社会をめざす

課題について

高齢化、障害者について述べられているが、がんのターミナル（グループホーム）・難病についてはどのように考えていくのでしょうか。

長田区の方で個人でターミナルグループホーム（5 Bed）を持ち活動している人がいますが好評です。地域の中でその人がその人らしく尊厳を持って生活していかれることを支えるには必要なことと思います。

神戸市総合基本計画審議会 第3回市民生活部会 議事要旨

日時：平成21年10月22日（木） 16：00～18：00

場所：市役所1号館27階 市会第2委員会室

出席委員：松原部会長ほか委員23名

【議事要旨】

- ・ 松原部会長の挨拶のあと、事務局より、前回議事についての確認が行われた。
- ・ 松原部会長から議事次第に従い議事に入る旨発言があり、本日の議題である審議資料（資料4及び5）について事務局より順次、説明が行われ、審議された。

（審議内容についての委員意見は以下のとおり。）

【議題：前回議事についての確認】

前回議事については、承認

【議題：一人ひとりを大切に作る】

（UDの考え方について）

- ・ UDという言葉の認知度は、目標に比べてまだまだ低い。
- ・ 外国人居住者や障害児など、あらゆる人をしっかりと包み込み、受け入れる「ソーシャル・インクルージョン」という考え方をはつきりと出していく必要がある。
- ・ 「市有建築物（新增改築）のUD取り組み割合100%」というのは、従来のハードを中心にしたバリアフリー基準での話であって、より広いUDの見地からは、既存施設についても改良すべき点は多い。
- ・ 地場産業や観光をUDの視点からとらえなおすことで、経済的な効果も生まれる。
- ・ UDの基本は、ノーマライゼーションをどこまで追求するかということであり、いざという時に医療をどのように確保するかが重要になる。市民病院群の救急体制が手薄になってきており、移転後の中央市民病院では高度医療をめざす一方で病床数が減るという問題があるが、救急体制をしっかりと確保することが重要であり、特に障害者については軽い傷病でもいつでも市民病院で受け入れることが必要である。
- ・ UDは社会活動の基盤に属する話であり、「子ども」や、「高齢者」等とは少し違う位置づけが必要ではないか。

（UDの取り組み方法について）

- ・ UDの取り組みは、特定の組織や団体だけのものではならず、既存の取り組みともうまくリンクしないといけない。各区の「ふれあいのまちづくり協議会」等の活動は、まさに神戸らしい地域のUD活動ではないかと思う。
- ・ UDを本当に広めるためには、たとえばアメリカにおける文書のデジタル化などのように、みんなで意識的に取り組むための義務付け等の仕組みが重要と思う。

(外国人について)

・在住外国人にとって、社会で暮らしにくいという状況が現実にはたくさんあり、社会全体としてユニバーサル社会をめざすというところまでなかなか届いていない。地域でのまちづくりにも在住外国人が参加したり、意見をいかに反映して社会の活性化に結びつけていくかということが課題である。

・外国人にもいろいろあり、抱えている課題も様々なので、「外国人コミュニティ」と一くくりに論じるのは非常に難しい。

・神戸は外国人にとって本当に住みやすく、多言語の情報も多いので、後はそれをどう活用するかという問題である。

・神戸には、欧米人に魅力ある観光スポットが少ない、観光地にごみが多いなどの問題がある。

【議題：特色ある教育を推進する・生きがいのある暮らしをすすめる】

(全般について)

・「教育の神戸」と言われるような打ち出し方をして、自分の子どもや孫を神戸で育てたいと思えるようなものにしたい。

・神戸の一番の特色に「教育」というのが中心に来るようなまちをつくっていきたい。教育からスタートして、初めて神戸から海外等へいろいろな分野の人材がどんどん出せる、それを本当の神戸の特色にすべきではないか。

・昨年出された新しい教育課程の並びは「各教科、道徳、外国語活動、総合的な学習の時間、特別活動」の5領域なので、それにシフトした記述にして、それぞれ施策を打つのがよいと思う。

・神戸の教育は、個々の施策を丁寧に万遍無くやっているが、“神戸らしさ”ということからいくと、たとえば「英語も日本語も含めた語学力」、「表現力」、「防災の意識やスキル」などの向上を目指すなど、特色ある打ち出しができないか。

・子どもの学力を保障するという観点が必要。そのための学習指導基準が、神戸スタンダードや神戸ミニマムである。

・朝食をしっかり食べるなど、生活や健康があつてこそ、学力や心が育まれる。

・消費者教育を小中高の間にいずれかでしっかりと実施してほしい。

・日本語教育が必要な子どものデータの中で、英語しかできない子どもというのが全く出てこないのは不思議に感じる。

・最大の教育環境は、施設・設備もあるが、「教師自身」だと思うが、現状は教師の負担が大きく、本当の力をつけていく機会や時間的余裕がなかなかない。学校教育を、教師・家庭・地域の役割に分け、全体で支えていくことが必要だと思う。

(地域との連携について)

・「神戸は社会全体で子どもの成長、発達を支える教育的社会をめざす」ということをはっきり言うべき。

・学校の安全・安心の確保は重要で、地域が学校をつくるという発想のもとに、学校の安全・安心、管理をきっちりしていくということが、耐震化と並んで網羅されるべきではないかと思う。

- ・「学校から家庭や地域に対する情報発信の強化」を進める具体策が必要。
- ・連携にあたっては、学校側のニーズから出発するだけでなく、家庭や地域のニーズへの対応も考えてほしい。
- ・地域は、自分たちが本当に必要だと感じることはできない。この部分だけを地域にお願いしたい、とはっきり言ってもらった方がよい。学校現場も日々いろいろなことに追われているので、調整しながら教育支援を行うのは非常にたいへんである。
- ・子どもは学校だけでなく放課後の過ごし方をしているかが非常に重要。NPOなどと連携して学童保育の充実、スポーツなどをそこに盛り込めればと思う。
- ・学校施設の地域での利活用をもっと進められないか。校舎、運動場などの学校の施設は、地域スポーツクラブや文化活動などに使われていると思うが、実際には、昼は学校は子どもたちがいるし、夜になると、ほとんどの学校は電気が消えて暗い。せつかくの施設だから、例えば、夜も教室や運動場、体育館を使えるとか、地域の方が気楽にウィークデーを通して設備を使えるなどの取り組みの方向性があるのもよいのではないか。運動したいと思っても、例えば、グラウンドは神戸市内にそんなにたくさんありません。昼間の校長先生では管理が大変だから、「夜の校長先生」などの発想があってもよいのではないか。

(豊かな心を育む教育について)

- ・取り組みの方向性のうち「確かな学力」「健康・体力」は目に見えるが、「豊かな心」という見えない部分について、教員や親がしっかりした物差しを持てるかという課題がある。
- ・これからの教育では「観る（みる）」という部分が非常に大事になる。
- ・市民としての意識や義務について教育の中でしっかり取り組まないと、権利は非常に主張するがやるべきことをやらないという形の社会になりかねない。
- ・人権教育は小さい時から少しずつ順番に染み込ませるように取り組む必要がある。たとえば中学生の時に性差別的な意識を持たせないなど、年齢によって必要な教育内容がある。
- ・「子ども同士のやさしさ」、「物に感動する心」、「友だちと喜べる心」、あるいは、ほとんど言われないが、「我慢する力」も豊かな心である。
- ・人権の心を育てるうえで、「年齢に“つ”のつくとき」、つまり年齢が一つ～九つまでに家庭でしっかりしつけをすることが大切である。
- ・学芸会で主役を何人の子どもが交代でやるより、主役だけでなく支える人が大切だということをきっちり教えるべき。
- ・一人の人間は様々な役割を背負っており、全体像が市民に訴えられて、初めて、子供の将来に対しての保障や、責任の所在、権利や義務なども見えてくるのではないか。

(幼少時の教育について)

- ・データについては義務教育の小中学校が中心になっているが、幼稚園・保育園における就学前の教育もしっかり書くべき。小学校での問題行動についても、就学前の教育環境等から見えてくるものもある。
- ・幼稚園の小さな子どもたちについては、遊びや生活がもう少し言及されるとありがたい。

- ・小中の一貫のカリキュラムだけでなく、幼・保の小学校との連携も大切。

(障害をもつ子どもについて)

・障害児教育について、全く盛り込まれていないように感じる。障害時を特別視せずに教育全般に含めているということかもしれないが、あまりに埋没してしまっている。発達障害を含めた記述をお願いしたい。

・LDの子どもたちは、特別支援教育の中や、こういう子どもたちを持つ親だけが勉強していくということではなくて、それ以外の周りの支えという比重が大きい。学校教育やPTA等の中での発信というのはぜひお願いしたい。

(体力・スポーツについて)

・神戸の子どもたちは、都会っ子で、体力が全国標準よりも落ちる。子どもに沿うという側面と子どもを鍛えるという側面の両面が網羅されるべきである。

・「健康と体力」という部分があまり盛り込まれていない。

・スポーツを「ささえる」より「参加する」という位置づけができれば有意義である。また、集客力のあるスポーツイベントの誘致も効果的と思う。

意見用紙による委員追加意見について

○ 中村順子委員

3. 暮らしに安全と安心をもたらす

(3) 生きがいのある暮らしをすすめる

2. (2) 生涯学習の推進

- ・ 既存の生涯学習機関および民間や大学等との連携による、いくつになっても、いつでも学べる学習機会の提供。
- ・ 市民の多様なニーズに応じた主体的な生涯学習への支援。
- ・ 生涯学習で学んだ成果を地域社会に還元するためのカリキュラム開発や活動への参加機会が提供できるしくみづくり。

理由：①団塊世代以降のライフスタイルもにらみ、いくつになっても、いつでも（これは若年ニート対策でもある）学べる機会が必要

②現行の生涯学習における学び中心の姿勢から、地域活動者又は応援者となるアウトプットを明確に持つこと。

日時：平成21年8月27日（木）9:00～11:05

場所：三宮研修センター605号会議室

出席委員：加藤恵正部会長ほか委員22名

【議事要旨】

- ・ 鶴崎副市長挨拶、加藤部会長挨拶のあと、議事に先立ち事務局より、資料2「第1回総会会議要旨」及び資料3「今後の審議スケジュール」について説明があった。
- ・ 加藤部会長から議事次第に従い議事に入る旨発言があり、本日の議題である「活力・魅力部会審議資料」（資料4及び資料5）について、事務局より順次、説明が行われ、審議された。（審議内容についての委員意見は以下のとおり。）

（議題1 活力・魅力部会審議資料のうち、資料4主な取り組みにかかる委員意見等）

- ・ グローバルに対し、ローカルエコノミーという言葉が対にして出しているが、対になる地域経済を象徴する言葉が欲しい。
- ・ 横文字が多い。ローカルエコノミーより地域経済の方が市民は分かりやすい。また、「ローカルエコノミーを守る」ではなく「つくる」とした方がよい。
- ・ 神戸は外国人好みの地形で自然が豊かなまちである。欧米人が憧れるギリシャ・ソレントのような雰囲気があり、強みとして活用すべき。しかし、三宮の街には統一感がない。
- ・ 魅力があると感じる都市には、人材が集積しやすく、産業が根付きやすいという議論がある。
- ・ 資料にはSWOT分析のうち弱みが記載されていない。
- ・ 強みの中に、減災に対し意識が強い都市もあると思う。減災都市を産業に結びつけるということまではないが、災害への備えや思いやりのあるまちという点は都市の魅力となりえる。
- ・ 関西経済連合会の会議で、ブランドは地域の価値観で形成されるという議論があった。ブランドは、産業・魅力を高めるソフトのインフラである。
- ・ 外国人からの多様な人材の集積、外国籍の人々の動きも踏まえての展望を考えて実施すべき。
- ・ 国際都市・医療産業都市、デザイン都市、田園都市など全部の意味を集約し、「世界とふれあう市民創造都市」のようなコンセプトが必要。

（議題2 「神戸の魅力発信と集客観光の強化」にかかる委員意見等）

- ・ ICTを活用した観光情報の発信が、神戸は弱い。例えば、沖縄、静岡、北海道は、中国や韓国の人気サイトにヒットするように、非常に気を使っている。観光客の情報検索、予約を入れるのもインターネット経由。神戸に来訪する人の気持ちになって情報発信（HPを作成）をすべきである。神戸空港開設時にも提案したが、神戸観光のポータルサイトを空港のページなど良くヒットするページに設けてはどうか。
- ・ 新長田に製作中の鉄人28号、三国志の石造などは他都市から羨まれる観光資源である。
- ・ ジャズ博物館をハーバーランドに作るという話もある。ラジオ関西には、ルイ・アームストロングの輸入版（国会図書館にもない）といったコンテンツもある。これも目に見える観光資源。
- ・ 大型コンベンションセンターを集客の柱にしてはどうか。大規模な学会をしようとしても、横

浜・京都しかない。京都は老朽化している。神戸に学会で来てもらい、新幹線で京都に行くとしても、近畿圏で潤う方が良い。

- ・ 学会を中心としたコンベンションや医療のメディカルツーリズムを集客の柱にし、記載のレベルを上げるべき。
- ・ 医療産業都市構想は、世界でも初めてに近い計画だが、研究分野が進捗し市内への波及はこれからになっている。ビジネスになる分野としてメディカルツーリズムがあるが、シンガポール、タイ、韓国に先を越されてしまった。
- ・ メディカルツーリズムでは、言語、風習、付き添いの手配、ビジネスジェットなど様々な要素が必要になる。中東の産油国を対象に話があった。
- ・ 観光資源の受け皿が必要。長期体験型の観光に対応する受け皿やホームステイのシステムを作っておくべき。
- ・ 知的レベルが高く、子どもが成人し、退職された人々が多く存在する。この人たちをホームステイの受け皿にしてはどうか。両方にメリットがある上、交流や観光にもつながる。
- ・ 京都・大阪と観光でつながる奈良には資源があるが滞在はほとんどない。しかし、神戸なら滞在して京都・奈良に行ける。
- ・ 国の制度になるかもしれないが、オーストラリアのように若い人のワーキングホリデーのような仕組みがあれば、長期滞在がしやすくなる。
- ・ 交流都市を目指すあたり、本当にオンリーワンは何か、質的な整理が必要。
- ・ 医療産業はアドバンテージがあるが、コンベンションは弱くなっている。メリハリや優先度をつけ、絞っていかないと神戸市の計画とならない。
- ・ 神戸は、欧米人が非常に好む都市景観を持つ。例えば、オンリーワンの強みとして、瀬戸内クルーズの母港がある。これはオンリーワン。
- ・ 外国人が関西を訪れる際の玄関にする。物流でハブアンドスポークの考えがあるが、観光交流にもハブの考え方を採用する。神戸で囲いこむ必要はない。神戸から瀬戸内を観光する。神戸から京都に行くということで良いのではないか。
- ・ また、クルーズは、造船業など産業の育成にもつながる。客船にも目を向けておくべき。
- ・ 神戸からおこったルミナリエ、ジャズストリートは、神戸の下地があつてこそこのイベント。他都市でやっても上手くいかなかった。でも、神戸はすぐにやめようとか縮小しようとしてしまう。継続して強化することが必要。
- ・ 地元の方が神戸の魅力を発信することが重要で、150 万人も市民がいるのだから、小さな発信でもかなりのことができる。
- ・ 市は、市内、市民に対して情報発信が下手。市民のなかにも、個人で国際交流をしている人が多い。この人達の力を活用することで、国際交流も促進する。
- ・ 市民がお金を掛けずに様々なことができることが喜ばれるのではないか。
- ・ 知の集積においては、まず青少年の教育を充実させ、最先端の技術を担う世代を育てていくことが必要になる。
- ・ 例えば、PI2期の広場で、ピタゴラスの定理を使って木の高さをはかるとかも一案。
- ・ 〈安・近・短〉は、すべての人が求めている基本で、花鳥園、科学館を含めた共通の入園券などの発行することの決断も必要。企業の施設の一般公開など次世代が科学に興味を持つような過し方を企画・提供してはどうか。

- ・ 経済産業省・文部科学省が、全国の5箇所を、クラスターとして認定し、神戸と大阪がバイオメディカルクラスターに認定されている。学術を通じた交流にも注力すべき。
- ・ ミシュランのガイドブックには、京都・奈良は3つ星で、大阪は2つ星、神戸は1つ星となっていた。

京都の観光を審議する会議の議事録を見てみると、外国人の誘致には、まちなみと温泉と水の3つの要素が重要であり、京都には古都のまちなみがあるが、温泉と水がない。どこかと組めばとあった。

一方、神戸には「温泉」と「水」がある。有馬温泉は遠いという印象があるが、都心から30分で意外に近い。京都と組むこと、有馬温泉は近いということアピールし、外国人を引き込むべきである。

- ・ 外国人観光客のプラットフォームというか、受け皿が必要ではないか。欧米で良くある「i (イノベーション)」というマークの付いたものが必要ではないか。
- ・ オンリーワンの観光資源、ICTの観光客の視点に立った活用、広域観光、市民との連携、他
- ・ 産業との連携や波及（新しい観光のありよう）などを審議していただければと思う。

（議題3：「文化創生都市の推進によるまちづくりやにぎわいの創出」にかかる委員意見等）

- ・ 文化創生都市プランを作ったが、作成した当時は、観光産業を意識するより、震災によって劣後になりそうな神戸の文化をいかに維持していくかがまず念頭にあったが、作っていく過程で、市民の文化と文化を活かした都市戦略の両輪にしていった。この両輪の構造は、しっかりしていると思うので、次の計画にも活用できると思う。ただ、その後、更に、文化と観光や文化と産業の視点が盛り込まれるべきだと思うので、考えていって欲しい。特に文化は観光の下支えになっているし、ストックだと思う。一方、観光も文化も不易流行で行うべきで、絶えず変化して新しいものを取り入れる部分と変化しないものを関連しながら実施していくべき。また、神戸の市民性を活かすべき。「3日たてば神戸っこ」とその特長を思うのだが、排他性が京都や大阪と比べてない。良い資質だと思うので、神戸の文化を考える上で取り込んで欲しい。
- ・ 文化は、ソフトウェアやハードウェアの下にあるヒューマンウェアで成り立っている。
- ・ 文化のあるべき姿については、抽象的すぎ、観光のあるべき姿との統一感がない。
- ・ A3のペーパーについては、文化だけ青文字がなく、4次計画からの違いがないように見える。文化創生都市に伴う取り組みも4次の計画から異なったところ。
- ・ 市街地の文化は意識されているが、西北神の広大な地域の文化について無視すべきではない。中世から保存・継承されているものがあるはず。お祭り、慣習を細かくリストアップし、どこでどういう行事をしているかデータがあれば活用できると思う。
- ・ 文化の発信の源として、出版社が少ない。インターネットは確かに大きくなっているが、紙媒体の効果は依然として大きい。私も神戸の某出版社から出版していただいたが、全国版とは言いがたい。是非考えていただきたい。
- ・ 高尚な文化も大切なのは分かる。また、B級グルメやサブカルチャーのような文化も大切にすべきだ。長田のそば飯、有名なヘアデザイナー、南女持ち（甲南女子大学から流行したショルダーバックの持ち方）など産業や生活に結びついた文化も重要。芸術だけでなく、子ども目線、大人目線、産業目線の文化もあってよい。
- ・ イギリスに学術研究に行った際、9時にパブの前で待ち合わせをしたが、子どもをベビーシッ

ターに預け、ご夫妻で来られていた。スタイリッシュでカッコいい文化である。ある種の文化は社会インフラとセットでないと育たない。

- ・ 西宮は、芸術文化センターを市民で盛り立てているが、神戸の人は一杯ありすぎて、クール。源氏物語1000年祭りも、須磨・明石の舞台もあるのに、京都でのみ盛り上がっていた。開港140周年祭、ビエンナーレも、市民がクールで、もう少し盛り立ててくれればと思う。
- ・ 先程の神木先生のご意見に答えたい。昭和47年から55年に教育委員会が、神戸市内にある江戸時代からの民俗芸能を調査したことがある。高度成長期の調査であり、廃れたものがあるかもしれないが、稀有で基調な調査である。
- ・ 神戸市は、大阪市の面積の倍もある。様々な地域があり、文化もある。そのなかで、PRしなくても日本中が知っている5つの地名がある。文学と歴史の「須磨」、自然の「六甲山」、生一本の「灘」、最古泉の「有馬」、それと現在では県の名前にもなった「兵庫津」である。これだけ地名度があるということは、経済圏もあった訳で文化もある。開港以来のエキゾチックな文化だけでなく、これらも文化のインフラとして活かすべき。
- ・ 神戸には民俗文化が多国籍で多様なものがあり、南京町の関帝廟、長田のマダンについても、ご存知ない方も多し。忘れられているが、民俗に根付いたものは、観光にも活用できる。
- ・ 港と街や市民が遠い。シドニーなど港町に行くと、通勤に船を使う人がいる。神戸ではそうではない。通勤への船便はペイしないので成り立たないかもしれないが、市民が船を日常に使う風景があつてこそ、港と市民が近く、港町に住んでいる実感がわくのではないか。
- ・ 文化については、参画と協働というが、行政は何ができるか、プラットフォームをつくるのか、場をつくるのか役割の議論も必要。最低限、ファシリテイトする役割をはたしていくべき。
- ・ 経済同友会で、「神戸らしさ」と神戸の市民性について、提言をした。おしゃれで文化的、山と海とがある。神戸の文化やイメージが神戸観光の基にあるのなら、文化を高めることが観光などにつながる。
- ・ 市民の生活文化的なものを高めることが重要で、神戸では喫茶店がどこもおしゃれであるというような、ソフトのインフラに腐心していただいたら良いと思う。
- ・ オンリーワンの神戸をどのようにつくるかについて、デザインの視点を取り入れて欲しい。デザインで心をつかむようにして欲しい。
- ・ また、三宮、新神戸、港など点としては質が高いが、つなぐ部分にデザインを取り入れてはどうか。例えば、スペイン出身のサンティアゴ・カラトラバの橋のデザインは非常に繊細で先端的である。デザインを可視的に見せることは効果があると思う。
- ・ 市民あつてこそその文化や観光であると思った。受け入れる神戸の心の広さを踏まえた記述にして欲しい。また、洋風的なものだけでなく、須磨、有馬など日本的な歴史もあることを踏まえたものにしてはと思った。
- ・ 神戸の文化はライフスタイルそのものにリンクしている。
- ・ また、文化における行政の役割は何であるか、議論の整理をしていきたい。
- ・

以上

神戸市総合基本計画審議会 第2回活力・魅力部会議事要旨

日時： 平成21年10月5日（月）15:00～17:30

場所： 神戸市役所1号館14階大会議室

出席委員：加藤恵正部会長ほか委員30名

【会議要旨】

- ・ 議事に先立ち事務局より、資料2「第1回活力・魅力部会議事要旨」により、前回の議事内容について確認が行われた。
- ・ 加藤部会長から議事次第に従い議事に入る旨発言があり、本日の議題である「活力・魅力部会審議資料」（資料3）について、事務局より順次、説明が行われ、審議された。
（審議内容についての委員意見は以下のとおり。）

（議題1 活力・魅力部会審議資料のうち、資料3の2（1）地域産業の活性化に係る委員意見等）

- ・ 商業では、小売市場や商店街の空店舗が増えて、中央市場でさえ衰退しておりいい知恵が出ない。思い切って地域の市場の都市計画的手法による集約が必要でないか。また、大店の出店により小売が潰れ、大店も中央市場でなく大阪で買っているのが現状だろう。市内小売に品物が少なく消費者はスーパーに行くという悪循環になっている。例えば、卸や小売との相談が必要であるが、中央市場での市場まつりなどをみると集客力があることがわかる。西側再開発は、誰かがコーディネーターとなってスーパーではない小売機能を持たせるといった思い切った方向性を打ち出せないか。
- ・ 国では農業の国際競争力強化を進めており、都市近郊の北・西区では、集落農営など多様な担い手の育成、販路拡大による生産力向上と安定的な農産物の提供を進めている。農地法の改正で、農地の効率的利用促進が可能となり、高齢化などの問題はあるが、集落・農業者・関係団体・神戸市などと一体となった施策の推進が有効だと思う。
- ・ 北・西区の農家は6千あるが担い手が減っている。減反地で米粉などを作り、米粉パンを学校給食、ベーカリーなどで使うなど担い手、農業が増える施策が打ち出せたらいい。
- ・ 震災で持ちこたえた事業者であるにも関わらず、2001年から5年間で1～4人までの事業所数が廃業、倒産などにより2千5百減ったが、これは商店街に対する行政の不備である。商店街を集約するのも一つかもしれないが、高齢化に向けて、地域ごとに歴史ある商店街をどうやっていくのか考えていかないといけない。（“2千5百減”―事業所企業統計「民営事業所 全事業所 2001年と2006年の事業所数比較」、商店街含む市内全事業所の数値。）
- ・ 地産地消といわれて久しいが、新鮮な魚を市民に提供しようとしてもいきわたらない。過去は魚屋さんが各町商店街にあったが、今は量販店が主流で地元というより全国から安いものを集めて売っていて地産地消は置き去りになっている。例えば、しらすなど加工して中央市場におろすと原価割れするので、直売所をつくったり六甲の恵み（直売所）などで売ってもらったりしている。震災後、花隈などの料亭もなくなり、高付加価値産品も量販店を通じた流通となり厳しい。加工場経営での雇用にも取り組んでやっているが市場ギャップがあり、通年を通じて採用できない。地産地消の核を市でなんとか担っていただければと思う。
- ・ 農業は、期待されている産業の一つとして多くの人々に認識されており、日本農学のレベルは

非常に高く、安全で栄養価の高い生産物であり、高付加価値で輸出もしている状況である。極論であるが、日本の食料自給率が下がって食糧危機が来て初めて本当の意味で農業は立ち上がるのかも知れない。農業従事者が食べていける産業でなければならない。資料にある将来像に、担い手や土地利用で神戸のリソースをどう利用して、神戸らしい農業を作っていくか、優先順位をどうつけてやっていくか。神戸の農業は、食、健康、医療、観光などの魅力的なキーワードとうまく融合させれば、神戸の大都市圏での農業をうまく作っていけると思う。もっとも大事なことは、後継者問題だけでなく、まさに新規参入であると思っている。企業のノウハウが入ってこないと農業再生はない。

- ・ 消費者からすると安いものが買いやすく手に入ればよい。このニーズに答えていることを考えれば、なぜ量販店に行くのかがわかる。コストを下げるために常に流通システムを改良し続けている。流通システムに対して一般の農家、漁業関係者など個人だけに委ねるのは大変だと思うので行政からいい仕組みを提案できればいいのではないかと思う。
- ・ 現在の商業は家主業に変わっていて家賃で食べていて商業はやってない。はずかしながら商業では食べていけない、そのような状況である。
- ・ 商業はだめといわれると言にくいだが、資料の商業のめざすべき将来の姿で書かれていることは確かにそうだと思う。ただ、震災後、農業・漁業・商業などはビジネスと違う部分での役割を果たしてきた。商業も震災時に地域のプラットフォームとしての役割を果たしてきたが、本来はビジネスとして立ち立ちを考えないといけなかったのにその役割に徹していた。ボランティアでないので、商業、農漁業も、そろそろ「業」として成り立つ施策を本気で考えないと、後継者も新規参入もなく魅力ある産業となっていくか。量販店など大資本は知恵、知識を使って革新的なことをやっている。小規模・零細とどう一緒になって考えていくか。コーディネーターが必要だとか、商店街がディベロッパになってしまっているなどの意見があったが、業として自ら企画開発、人材育成の施策を考えないといけない時期にきている。
- ・ 魚の価格だが消費者の手元では3倍になっている、マージンがどれだけとられているか。消費者がだまされている。大型店舗の規制が必要。
- ・ 大型店舗の問題だけかどうかは難しい問題かもしれない。
- ・ 農業の総生産は10兆円を切っていて、そこでお生活している人が多くいるので、食料自給率を上げて生産性を上げるようにもって行くことが必要。
- ・ 活性化とはどこを目指しているのか、地産地消などに心がけている市民もいるのだろうが、現状と比較して15年後にこのまま進めばどうなるのか市民には見えにくい。それが分かれば例えば地産地消を20%にするなどの市民一人ひとりの心がけが全体を動かすことにつながるだろうと思う。また、新規参入はリスクが高いが、コーディネータ役が必要と思う。例えば、神戸は洋菓子がブランドとして高いのであれば、洋菓子に必要な農産物のカシスやブルーベリーなどを神戸でつくって、需要と供給を結びつける、境界・分野をこえて俯瞰的視点から結びつけ、提案していける人が多く出てくればよいと思う。
- ・ 神戸市民は神戸スイーツをまちの誇りとしていて、小さな満足は自信と誇りになる。ケーキ店は「観光名所」であると、ケーキ屋の社長と話をして「不景気風はケーキ屋が景気を良くする」と一緒になって、観光客をもてなしや工夫をされている普段のお店にタクシーで連れていくと、お客さんは感動されている。多くの神戸市民が消費し地域で受け入れられるパンや洋菓子は裾野が広い。神戸のまちの魅力づくりのヒントになると思う。

- ・ 神戸に農漁業、商業など魅力的なベースがあるのは間違いないが、うまく浮かび上がってこない、なにかが邪魔しているように思う。従来から成功してきた都市に根ざした産業としてのあり方を抜本的に見直し、既得権益に縛られることなく、集団として、集積、地区としての姿勢を示す構図があれば変わってくる。アメリカの百兆ドルの資金がアジアに回ろうとしており、しがらみのとれた日本の次のステップのところに入ってくるだろうとあるエコノミストと話をしたことがある。地域活性化の核でもある領域のポテンシャルの高い農漁業、商業の新しい計画づくりにそれらがうまくつながればと思う。
- ・ 京都と神戸のまちづくりを比べると、京都は伝統・歴史に愛着を持って伝統をイノベーションしながらまちを維持してきた。神戸は、開港から生活文化産業など情報発信してきたが、京都と違う点は執着心がなく淡泊。重厚長大産業を中心に発展してきた、ファッションなども競争力があり、神戸ビーフ、神戸ウオータなど恵まれたものもある。ただ、スイーツの競争力はブランドイメージとしては残ってはいるものの、この11年間、デパチカでは、名古屋が1位である。灘の酒も量的には多いが高付加価値を付けた品質力という点では他と比べてどうか。神戸ファッションも日本を席卷する時代ではなくなってきつつある。神戸の資源をうまく育てていないことは行政側にも問題はある。何をしっかりと育てていくのか。神戸は比較的豊かだったのかハングリー精神がなくなってきている。過渡期である今なら間に合うのでこれから可能性はあると思っている。

(議題2 活力・魅力部会審議資料のうち、資料3の6 技術の向上と世界貢献の委員意見等)

- ・ 神戸は重厚長大産業の下請けが大半であり、中小・零細製造業は、図面から忠実に造り上げる力、技術力は世界に通用するが創造性という点で弱い面がある。震災後、倒産件数は全国比較では少ない。倒産の大半は後継者がいながらである。
- ・ 今、危惧することは、親会社である大企業が事業編成替えなどで神戸・兵庫から出て行くことと、価格競争の激化である。原子力、造船など新技術については、日本は得意分野である。例えば、自社は家電を扱っているが製品価格は例えば3年で3分の1となっている。また、消費される近くで造るという工業も地産地消になってきている。自動車も米国、欧州同時発売の時代で各国に工場を持ち、家電もそうになってきている。自社も生産拠点を海外に多くおき、国内は800人から400人に減らしており、生き延びるための選択肢である。ただ、コア技術、例えば金型は日本においておく。価格競争では、中国がプライスリーダーとなっているので大変な企業努力が必要。技術があっても客が低価格志向なのが課題である。
- ・ もう一つは少子化でものづくり人材の不足である。科学技術高校の卒業生400人のうち大学進学が多く、100名程度しか就職しない。技能者・技術者人材育成が必要である。
- ・ 世界に貢献するというのは付け足しのようなのだが、地域の活力を何によってはかるのかを明確にする必要がある。なにをメルクマールとするか。例えば、技術力の向上で活力をはかるのなら、起業数を増やすのか、研究所を多く誘致するのか。5年、10年かけて割合、数を増やしていくか、何をどう増せば活力・魅力になるか。目標を立て、それに向かって政策を集中してやっついていかないと出てこない。
- ・ 2010ビジョンでは評価をずっとやっている。いくつかの指標を出して見ていくということも行われている。戦略的な計画づくり、どういう状況にあるのかみることが必要であるということも重要である。

- ・ 技術がどんどん進んでいるので1台数千万円もする設備投資が必要で大変である。新規の起業数では難しい。指標は、生産高とか雇用数だと思う。
- ・ 起業数が増えるのと雇用者数が増えることは別だと思っている。起業した当時はITが成長できる自由な背景の中で規制もなかったが、商業や農業、工業は規制やヒエラルキーもあり難しいだろう。IT業界は、日本語という言語が障壁になり、市場が海外から参入が少ないという面もある。食料自給率などが国の大きなテーマとなって規制をかけない、地方に委ねるとなれば神戸での展開も可能でないか。
- ・ 市内研究機関には防災関連も多い。防災という観点で神戸の特色だせるものないかと思う。産業として防災企業など誘致して減災を目指すなどどうか。
- ・ 全体を通じてだが、神戸市の基本計画をつくっていく作業として、雇用創出効果があるとか、神戸の産業政策上の強み弱みがあってなどメリハリをきかさないと、この作業が収斂していくことになるか。少々総花的である。例えば、農業のところでもバランスよくやっていると書かれているが、神戸の生産と市民消費比較で自給自足できるかどうか、今までの産業構造と市民生活のバランスが取れているなら地産地消の方がエコロジーであるはず。事務局で神戸方式の案を出して、自立する都市として、域内でどうお金が循環するかが活力の大きな要素である。域内経済活性化、産業構造などを掘り下げて分析して資料を出してもらったほうがわかりやすい。
- ・ 事務局の資料は、色彩を出さず抑えてつくられており、委員からの意見で議論を深めてうちだしていきたいと考えでつくられている。より踏み込んだ提案をするために、戦略的なポリシープリンシプルがあって技術の向上が神戸でどう役割を担うのか、議論が必要と思うが、このあたり今後議論を深めていきたい。
- ・ これからは医療産業都市構想と次世代スーパーコンピュータである。例えば、医療機器は多種で幅がある。医師などの人材の意見をよく聴きターゲットを絞った企業誘致をすべき。また、医者からの注文で造る医療機器などはブランド的なものが必要。また、次世代スーパーコンピュータを使えるようソフトを作るなど方策など見えてこない。広報、企業誘致に務めてほしい。
- ・ 「知の集積」で議論されることだろうが、ポートアイランドの利用は神戸市にとって極めて重要である。スパコン、医療、ロボット、創薬など産学、市、県の連携をうまく作って起爆剤とするなど強調してほしい。
- ・ 労働者に多く給料を払える企業がどれだけ来てくれるかが重要、就業者に対するインカム。樹研やニデックなどどうして中京が強いかわかったことがあるが、東京を見ないで世界を見ている企業がしっかりしている印象がある。スパコン、医療産業都市は、イノベーションの核をここにおいているだけで、新しい企業がどれだけくるか。神戸市の企業誘致はフレキシビリティがあるが、(研究とつながる産業の)方向性がまだ難しい問題がある。高い給料が払われる企業がどれだけ来てくれるか、考案いただきたい。
- ・ 地域政策の関連から、様々な分野との連携を行政としてどうマネージメントできるか、教育、産学連携が重要で、これから重点化おいていただき、必然的に雇用につながってくるかと思う。

(議題3 活力・魅力部会審議資料のうち、資料7(1)のデザインをいかしたものづくりの支援に係る委員意見等)

- ・ パン、洋菓子、酒類などシェアが高いとの説明であるがネームバリューの割りに2%や4%程度

で十分なシェアといえるのか。神戸の機械金属などではシェアが高いことはあまり知られていない一方で、東大阪のイメージの方が強い。倒産より後継者不足、企業に来てくれることが重要ということであれば、ブランドイメージが高くなると後継者や担い手が増えてくるのではないか。

- 相対的にケーキのシェアは高いと思う。せつかく競争力のある間にシェアをキープできる風土が大事であるということ。今、質を高めないと新興勢力に負けてしまう。
- 資料の数値は工業統計の出荷額であって、神戸の製造品出荷額等の全国シェアが0.86%であることから考えると2%は比較的高いシェアであるということ。また、貴金属製品製造業には真珠加工も入っている。
- 酒類製造業のシェアは30%でここには日本酒だけではなくビールも入っている。データの取り方が大事である。
- 科学研究もデザインも基本は個人に依存するところが大きい。個人を育てても他所に行ってしまう。育てるだけでなく、神戸でどう使うかが大事。芸術家の研修施設もどう使うか。日本はそういうところが下手である。日本で売っているお菓子は、神戸が多いと感じた。神戸の強みは大衆の力であり、商品を大衆好みにしていく力であり、大衆の使い方である。京都のお菓子は買いに来いという感じだ。デザイン、科学のイノベーションはどう使われるかである。北野でいろんな建築家の建物があって素晴らしいと思うが、使われ方が大事である。有名な建築家が建築した建物が見えないという現状もある。
- ものづくりは物質ばかりでなく精神的なものもある。函館は魅力あるまち1位で夜景の日をつくるなど一体感がある。まちづくりに一体感を取り入れていただきたい。神戸まつりもインフルエンザでやめたが再開して活気付いてきた。また、神戸は国際宗教都市ともいえ、回教、ジャイナ教など様々に存在する。ローマ観光の目玉の一つは教会廻り、都市として国際性を取り入れていただきたい。
- デザイナーの考案したものを、どういう形で保護し、報酬の面でフォローしていくのか。「デザイン都市・神戸」を進める上で、法的な整備や保護の仕組みの整備が必要。
- デザインを技術利用する場合の基本は、それを使える仕組みがいること。一つひとつのデザインを大衆化していく仕組みが大事。その力が神戸にはある。ワールドやジャヴァ、ファミリアやイズムなどそういった会社がある。ケーキやサラダもひとつのデザインなので、それらを強みとしてうまくいかしていく。なぜ、毎年ウィーンフィルが日本に来るか。それはウィーンにはウィナホルンを直す楽器職人がいないが日本にはいるからである。デザイナーや伝統を抱える、それが重要なポイントである。
- 藍那との協働で米をつくり酒にして、大学で販売する、デザインの知恵が農業と商業を結びつけ流通にのせる仕組みをめざすが、酒税の問題など規制がある中、大学が次のステージを生み出すチャンスにチャレンジしている。資料にあるビジネスマッチングの仕組みにすべて大学が関わっている。企業、大学、神戸大、学園都市ユニティ連携、京都、工芸繊維、大阪大の連携等ほかの近畿圏の大学の連携をマネジメントしている。神戸の就業者のうち技術者の数が多いとの資料があったが、社会や技術を支える人材が神戸にたくさんいる。産業を生み出す土地であり、それらにデザインをいかして価値を生み出していく、その仕掛けが必要であると思う。デザイナーは、世界、アジアと直結して仕事している。神戸は、神戸だけでなく大阪、京都から人材を手繰り寄せ、素晴らしい技術とニーズがあう必要があり、ここにクリエイティブな視

点が必要になる。デザインは単なるものではなく心でもある。それをどこにストックするか。人材であり日常の生活である。そして、デザインは、単なるものでなく、価値化できるかという議論が必要。ストックされる人材を養成して育成することが必要である。神戸の施策の方向性として身近な居住環境、教育、医療などの基盤を押さえながら、新しい魅力を組んでいくことが課題と思っている。分野を超えていくものがデザインであるので、それに対応する国県市の組織、窓口の準備が必要である。

- 担い手の育成、人材の育成であるが、やる気のある人を探すこと、その人を支える仕組みづくりが大切。技術面、知恵、資金があるが、大事なのは気持ちを持ち続けることである。人材育成では、人の気持ちを支える仕組みがないと起業しても続かない。昔の魚屋さんや電気屋さんがそうであったように、利用者の求めるものを供給側がわかっていることがありがたがられ、求められている。現代はそういったサービスが必要とされている転換点の時期だと考える。高付加価値で高いものが売れる仕組みもある。
- 神戸のクオリティの高さが伝わってきた。日常の中でどれだけ感じられる発信がされているか。どう組み合わせ発信力を持つかである。それらを統合してそれをブランド、デザインというのが発信できればよいと思う。
- デザインを活かしたものづくり、ブランドというのは一種の価値観であると思うが、それが活かされていることが大事であると思う。
- コーディネーターが必要との指摘が多くあったが、業界ごとに困っている点や課題をまとめて整理されているものがあるだろうと思うので整理いただき示してほしい。また、めざすべき将来の姿が抽象的なのでこの言葉をどのように引き出したのか裏づけることや成功事例と成功の秘訣なども示していただければと思う。また、シェアの高いものだけでなく、今、急激に増えている、伸びている企業や産業、例えば、ロックフィールドの惣菜、計測機器のシスメックスなどの成功の原因なども資料としてそろえてもらえれば議論しやすいだろう。神戸の女性が働ける場、高齢者をいかす方策などといった仕組み、活力の源泉となるものも資料として、例えば、ボランティアで退職教員をいかす門真学校の例なども資料として出していただければ抽象化に役立つかと思う。
- 京都の会社など、欲しかったら取りに来てというのが京都企業であり、東京などに進出しないが高収益で地域に根ざした合理的経営。これに対し、神戸式経営というようなものがあるのであれば神戸を考えていく上で重要であると思う。

以上

神戸市総合基本計画審議会 第3回活力・魅力部会議事要旨

日時： 平成21年11月8日（日）13:00～15:23

場所： 神戸市役所1号館14階大会議室

出席委員：加藤恵正部会長ほか委員24名

【会議要旨】

- ・ 議事に先立ち事務局より、資料2「第2回活力・魅力部会議事要旨」により、前回の議事内容について確認が行われた。
- ・ 加藤部会長から議事次第に従い議事に入る旨発言があり、本日の議題である「活力・魅力部会審議資料」（資料3）について、事務局より順次、説明が行われ、審議された。

（審議内容についての委員意見は以下のとおり。）

（議題1 活力・魅力部会審議資料のうち、1 働く場の確保と人材の育成及び、2 産業の振興による地域社会の活性化のうち（2）くらしを支える企業の育成に係る委員意見等）

- ・ 派遣問題については雇用する側が雇うかどうか委ねられているところがある。企業は経営上、コストを抑えようとするから、派遣制度がある以上は利用するのはしかたがないが、同じ仕事であれば同じ賃金、報酬を支払う方がよいのではあるが。
- ・ 派遣と正規の賃金格差が話題になっているが、非正規が正社員の給料の半分という極端なことではない。中小企業は労働集約型が多く、昔は親会社との関係で受注保障されていたが、今は製品の価格競争が激しくなってすべて受注できるとは限らない。特に自動車業界などでは入札で契約がとれないと4年間仕事なくなることになりその後の保障ができないので、社員の半分以上は非正規に頼らざるを得ない。社会の仕組みが変わってきたことが事実としてある。
- ・ ワーク・ライフ・バランス、女性の就業環境の整備など最近はそのような言葉で言われているが、企業は昔から雇用確保のために対策を取っている。例えば、女性社員の雇用確保のために社内にスーパーから出向いてもらうといったことも考えてきていた。個別企業の取り組みのほか、制度として支援は必要であるかとも思うので、多いに議論をして働きやすいシステムをつくることは大事。出産後の復帰に向けた企業の取り組みや当事者のブランクに対する意識の差もあり、ギャップに対するきめ細かい制度も必要。
- ・ 製造業はグローバル社会の中で一層過酷なコスト競争にさらされ、労働力は景気循環に左右される。介護・医療など3次産業に力を入れない限り雇用の吸収は困難。神戸には処遇がいい企業や雇用があるといった産業がないと長期的に難しい。他都市で医療・介護などの産業施策を打ち出せばそちらにとられてしまうので早めに介護・医療産業を強化すべき。
- ・ 「安定した雇用の場の確保」と「多様な働きがいのある社会の構築」は非正規の点に注目すれば相矛盾するものである。非正規雇用がすべて悪というわけではなく、モビリティという流動性を高めつつ労働の場で気概を持って働けるような戦略をもっていくことが必要ではないか。
- ・ 女性就業率が神戸は低く、一方で労働力不足であるなら、眠っている女性の労働力を活用したり、介護・看護支援ニーズに対する労働につながる支援も考えるべき。結婚退職後、ハロ

ワークでパソコン講座を受けたが就業支援はなくアフターケアがなかった。働く場の紹介や就業に挑戦する若い人への支援があれば将来の仕事につながる。

- ・ 神戸の女性就業率が低い理由が仮に個人的な介護のためだとすれば、介護施設サービスや他の親も地域で看るなど、「介護」の社会化、社会的企業による解決を図ればどうか。
- ・ 社会的企業は、行政・民間が担えない社会課題を解決する事業主体であるが、「業」として成り立って雇用が吸収できるようなパイを持てるようにすることが大切。ワークシェアリングは仕事の分け合いであるが社会的企業はパイを拡大する。例えば、林業で植えた木が売れる時は孫の世代であるが、それを受け継ぐ人がいないという事例が報道されていたが、まさにそういう視点も必要。
- ・ 雇用の裏側に産業があり社会的企業は1つのジャンル。将来の神戸をめざしてどうするのかという視点が必要。東京は一人勝ちで地方はどこも同じ政策を考えがちである。神戸の産業構造の中で、医療産業やアニメーションなどもあるだろうが、やはり神戸は「港」が強みである。雇用ミスマッチは、マクロか神戸市レベルでみるかどうか市の対応が異なる。労働力には流動性があるので、社会増につながる施策が必要であり、労働力流入につながるような施策が必要である。神戸では神戸の強みをいかしたこの産業を育てていくといった、政策へつなげていく合理的な議論が必要である。ミスマッチに対する職業訓練も大事であるが、本当の働き方のあり方、多様な人々に対応する職の多様性も大事であって、無理してまで例えば介護1分野を職業訓練してもしかたがない。個性をいかした多様な働き方を提供するアプローチが必要である。また、ワーク・ライフ・バランスは、労働の質とライフの質のバランスが重要である。働き甲斐とか、働く意味、生きる力といった人間教育の面がないと、本当の意味での就業意欲にはつながらない、そういった点を重視すべきだと考える。
- ・ 社会的企業は、中間労働市場から通常の労働市場へ入っていけない人、はじき出された人を、いきがいを含めて働くということを考える領域と認識されるが、地域に根ざした神戸固有の働き方が大事になってくるということであろう。

(議題2 活力・魅力部会審議資料のうち、3 先進港神戸と神戸空港に係る委員意見等)

- ・ 神戸港は神戸経済の中心ではあるが、スーパー中枢港は全国に2つでいいと現政権はいつている。今後も西日本のハブ港として莫大なお金を使って、今、整備する必要があるのか疑問。モーダルシフトに努めCO2を減らすなど、環境配慮の方向に転じるべきである。
- ・ 神戸空港の搭乗率7割は、昔は大型機であったが今は小型中型機であり、それを比較すると7割は超えない。また、今年度3億円赤字の予算を組んでおり現実を見て見直すべき。
- ・ 神戸港の衰退は、韓国や台湾など他の港が国家を挙げて活性化に取り組んできたため、自治体レベルでは難しいところもあったが、ポートセールスだけでなく天津や上海長江プロジェクトでビジネス交渉を市も支援し推進するべき。神戸は具体のビジネスの話がでないからおもしろくない、という声も聞く。神戸市でも、極東・ロシアなどに着目して参画してもらいたい。
- ・ 都市の装置として「港」書き込んで欲しい。貨物量、ポートセールスは当然に頑張っていたきたいが、港の位置づけとしては、神戸経済、活力・魅力ある産業をどう貼り付けていくか。貨物、旅客、造船、海運、海事従事者養成など単なる駅でない海事クラスターとする意識が必要。都市空間を活用して市内総生産、雇用を増やすため臨海部についても力を入れて

いただきたい。瀬戸内クルーズも、造船業や集客観光都市としての魅力として、神戸が母港となることで広域集客のコアな港となり、ミニクラスターとなるのでお願いしたい。

- ・ 神戸空港では、関空、伊丹3空港問題について、大阪府知事は関空と神戸といていたが、関空との連携、例えば、関空発着便に神戸空港の国内便の時間を合わせるとか考慮して検討いただくとかが活用のポイントであると思う。
- ・ 日本航空撤退はどうしようもないので空港という資産をもっと評価すべき。景気によってはまた戻ってくるかもしれないが、早朝夜間の増便に務めていただきたい。医療ツーリズムという考えで、中東、ロシア、韓国、中国などからビジネスジェットを利用した患者を受け入れて医療産業に活用すること。そのためにはまず病院が必要であり、需要がどれくらいあるかを現地を良くみて掴んで、例えば中東なら一般市民が補助を受けて海外に医療を求めてやってくる。そういった神戸空港の利用をもっと考えるべきである。
- ・ 空港は貨物をもっと考えればよい。日本全国の特産品を神戸に集めてはどうか。
- ・ 航空会社は赤字だが、ライアンエアは黒字。ローコストキャリアもつぶれるところがあるが、運輸行政の規制は多いがオープンスカイになってくれればかわってくるだろう。
- ・ 空港と港はセットで考えればよい。鮮度の高いものは飛行機、ゆっくりならば船というようにニーズがそれぞれある。時間をコストに換算している。医療産業都市が根付いていけば世界に向けて出て行くものもあるだろうから、セットにして考えていただければよい。
- ・ 先端医療の患者のための空港のバリアフリー強化など新幹線より空港を使いたいと思わせるサービスをつくれればよい。

(議題3 活力・魅力部会審議資料のうち、5知の集積による新たな価値創造に係る委員意見等)

- ・ 医療産業都市構想から11年を経ている。医師会は市民のかかりつけ医集団であるので医療産業都市構想のサポートや意見を言いたい。
 - ①いきなりの苦言であるが、医療荒廃を市民も感じている。メディカルイノベーションシステムは、市民の目線からかけ離れているという印象をもつのでこの場でも議論いただきたい。
 - ②また、医工連携については、医療、介護の現場からのニーズから発せられたものか疑問視されている。産業振興の観点からだけでなく、市民に向けた産官学のアナウンスが必要で、市民の求めるゴールはなにか検証すべき時であるとする。③市民向けの情報発信の方向について、市民の合意がなければ説明責任は果たせない。④関西バイオメディカル構想では、大阪で創薬、神戸は再生医療としていたが、分子イメージングセンターが神戸で動き出してから、創薬を神戸ならやれるのではないかという風潮が強まっている。市民がどう受け止めているか。
 - ⑤新市民病院構想は、中央市民病院が先端医療センターと隣接した新病院、高度専門病院群と一体的になったものであり、スーパー特区に絡む病院も含め、あの地域に1次からスーパー3次医療までが集約されていくものである。ただ、病床数の規制もあり、慣れ親しんだ病院が移転してしまうことが、市民の求めていることなのか。⑥健康を楽しむまちづくり構想は、市民参加という点で後付された構想で、これが本当に神戸の地場産業の発展に寄与するのであれば良いが、個人認証、個人情報保護の観点から行政がどこまで、個人の健康に踏み込めるのか。いずれも市民の意思、目線から考えてもらいたい。
- ・ メディカルツーリズムに力を入れているのは国民医療が育っていない国で、高度医療を持て

ば神戸も勝てるだろうが、一番重要なのは神戸市民が良い医療を受け入れることであり、医療評価で患者満足度を上げること、長期間の視点で診ることが大事。また、市民にとっては高度な医療が神戸に集中しているもメリットである。総合病院システムが医療費削減の考え方であるが、インテグレイティブプラクティスユニット（統括的業務手法）、エリア毎に得意な医療が集中すること、満足度の高い医療、長期間の疾病管理、適正な医療費というものが実現できれば、医療費が上がってきても一般の方の理解は得られると思う。

- ・ 先進国では、建設業5%、医療10%の割合であるが神戸はそれに近づいており、その中で医療産業都市構想を考えればよい。産業というところがわかりにくい患者満足度を高めるサービスを提供し、実現するための仕組みとして医師会とともに話し合っていながら医療産業都市構想を進めることが必要。
- ・ 医療産業都市、空港、次世代スーパーコンピュータなどのポートアイランド地域は、一部の人だけでなく大衆を引き付ける魅力あるまちづくりの仕掛け方策が必要で、もっと市民に認知をしてもらうことで皆で動いていけるような活気を出すべきである。
- ・ 知の集積ということであれば、島根に市が積極的に集積を図ってきたオープンソースのコミュニティがある。神戸でも地域ICT推進協議会（COPRI）で取り組みを始めている。それを核に、お金のかからない知の集積を図っていきたいと考えている。
- ・ 理研の次世代スーパーコンピュータがすぐに産業化に資するというのは早急である、もう少し未来的なものであり、オープンソース化には不向きではないか。
- ・ 農業分野では1980年代から農産物の遺伝子技術向上のために研究に取り組んできたが何十年もやっているが社会が受け入れないのでいまだにできない。デスバレーのギャップを埋めるには科学者だけでは難しく、農工、医工連携や社会学者などが協力しないと難しい。
- ・ 魔の川、死の谷、その先にはダーウィンの海があり、産業政策上の考えで進めると、人間性が埋没してしまう。
- ・ 次世代スーパーコンピュータに関して、地元中小企業がどう活用できるかが見えてこない。中小企業自らが活用するのは難しいのであれば応用を説明できる人材育成、テクノロジーをいかに産業に導いていけるか技術と経営の両方を理解しているMOT技術経営人材の育成にも力を入れてほしい。
- ・ 医療産業は国がすべきことだと思う。国費含め1300億円をつぎ込んできたが、今後も市費を入れ続けなければならないというのはどうか。
- ・ 一方で、中央市民病院は病床数減になり、救急者の受け入れ拒否も97件もあった。他国では国を挙げて取り組んでいる。次期基本計画では立ち止まって検討すべき。
- ・ 医療産業都市構想は、産業の拠点でいくのか、或いは、家族が来た場合の滞在の場所やメンタルケアのほか、医療法務に強い弁護士などの社会的インフラを組み込み、市内外の患者が来て高度な医療を手軽に受診できるような体制づくりとするのかを、考える時期に来たのだと思う。
- ・ 1300億円のうち976億円が国研究費である。医療産業都市構想は、神戸に優秀な臨床医が集まってくれて環境づくりであり、臨床医に役立つ研究機能を持ってくるということであらう。日本の医療制度の中では、市民病院の臨床医が市民病院だけでは患者ニーズが満足できない。神戸経済の効果としては17年度の単年度で409億程度と推計されている。（事務局）

- ・ 理化学研究所は国事業であり市民理解をどのように得るかが重要である。国事業を自治体事業と一緒にすることであり、市民や患者の団体とも一緒に取り組んでいる。
- ・ 市民への医療提供と国際的な医療ビジネス拠点としての役割の両方があり、世界でも多くない地域経済のモデル都市を目指して、展開を期待したい。
- ・ 信頼を失った社会、神戸市がどう改善するか、すべてをあらわにする必要がある。小学校6年生が社会で活躍する場面を想定してどう提案をしていくかである。現況データだけではなくこうありたいという仮説データも議論には必要である。神戸市がリーダーシップをとってきたように行政のリーダーシップが求められているのでこの会で提案していきたい。
- ・ デザインを科学の連携や横のつながり合わされることも課題である。対象と目的とプログラムをださないと思いつきで終わってしまう。「アジア」も対象を具体化すべき。デザインでも形や表象的なものでなく大学連携により生活スタイルをいかに豊かにするかを検討すべきである。
- ・ 計画は期待と成果が1対1に対応しない、分からないものも多く調整することも大変な作業であるが、多様なものの整理をしていくことが必要。情報の有無で解決できるものできないものもあり、事務局でうまくまとめていっていただきたい。

以上

神戸市総合基本計画審議会 第1回調整部会議事要旨

日 時：平成21年12月24日（木）9:00～12:00

場 所：1号館14階大会議室

出席委員：新野会長ほか計7名

【議事要旨】

- ・会議に先立ち、中村副市長挨拶に引き続き、事務局より資料2「審議経過」について説明があった。
- ・新野会長から議事次第に従い議事に入る旨発言があり、議事である『神戸づくりの指針』の全体構成の考え方（資料3～5）および「共通項目（行財政、人材）にかかる審議」（資料6）について、事務局より順次、説明が行われ審議された。

（審議内容についての委員意見は以下のとおり。）

（議題1 「神戸づくりの指針」の全体構成の考え方にかかる委員意見等）

【全体構成、項目のタイトル等について】

- ・全体構成の考え方を書いた資料3の3ページにタイトルとして「くらし・経済の基盤を固める」のほか案が3つ書かれているが、それだけでなく、「次世代のまち」や「持続可能なまち」というタイトルにも問題があるのではないかと。両方とも将来につながる時間軸のことであり、分けるべきものなのか。「次世代のまち」の中でも36ページに「こうべっ子」とあるが、なぜここだけ「こうべっ子」なのか。
- ・市民のくらしと経済は危機に面しており、この危機をどうするかということについてその乗り越え方を明示すべきである。「基盤を固める」ではなく、「まもる」なり「再生する」なり、今回のマスタープランのトーンとして「満足を増やす」だけでなく「不満足減らす」ことを市民・事業者など全体を通して、取り組みの姿勢として出して行こうという意識を持っている。
- ・資料3の3ページの3つ取り組みのネーミングについて、会長からご示唆をいただければありがたい。
- ・タイトルはこの言い方で全部まとめるのか、というと、ちょっと迫力が無いなという印象はある。
- ・「人財」という言葉で締めるのは、示唆的で良いのではないかと。人のどのような側面に着目するのは難しいところであるが、お金持ちのプリファレンス（好み、選択）もそうだが、新しい事にチャレンジするとか、若い人がチャレンジできる場づくりなども、ソーシャルインクルージョンの1つとして提示すればどうか。

【人口動向について】

- ・人口動向について、20年度は増加しているが、将来人口は146万人に減るという推計が示されている。しかしこれまでの経験からすると、区によって増減があり、区の中で

も変化がある。もう少し仔細に見ないと問題があるのではないか。

- ・人口については気になっている。新しい動きを示すデータがあれば説明いただければありがたい。
- ・この1年で中国人が約 1,600 人増えている（注：H20 から 21）が、なぜ急激に増えたのか知りたい。
- ・これから中国の人を集めることが神戸にとって必要と考える。年齢等の分類をとってほしい。
- ・兵庫県立大学の陳（来幸）教授（経済学部）が、中国人は圧倒的に東京に多いが、長期定住する人は神戸が多いということを言っている。
- ・韓国・朝鮮人も 4000 人（注：H20 から 21 の減少数 4,565 人）減っているが、国籍を日本に変える人が多いと聞く。そういうところも分析を進めてほしい。
- ・日本人の増加も、具体的にどういう層が増えているのかわかればありがたい。
- ・日本人の社会増の中で重要と思うのは、私の周りでは東京や大阪で高所得のビジネスマンが引退されて神戸に引っ越してくる人が多い。そのような観点も重要だ。
- ・まちが元気になるためには、人口が増えないとだめである。社会増は明確な戦略があれば可能である。中国人を積極的に集めるなどどういう人が神戸に魅力を感じ評価しているのか、という発想が必要で、スローガンのように「神戸はこんなところがいいんだ」とわかりやすく発信する神戸づくりにしていただければ、はっきりするのではないか。
- ・社会増の中身がどういう人たちなのか。東京をはじめ大都市の中には、都市は生活の便がいいからと高齢者が戻ってくる動きが顕著であると言われているが、神戸はどのようなまちになろうとしているのか。
- ・転出入は転勤などが多いのだろうが、満足度も関係する。理由のアンケートは取っていないのか。
- ・都市の基本的な力は人口にある、ということはわかっているが、神戸のあり方という点では昼夜人口の差というのも重要ではないか。甲南大学では大阪から多くの学生が通ってきて、まちで活動している。阪神間は住むところで大阪に働きに出る、という昔の方程式もあるが、定住人口を重視するのか、あるいは昼に神戸で働く人、といった視点も必要ではないか。

（事務局補足説明）

- ・人口の推計については、社人研の推計を超えて平成 21 年 12 月には 153 万 7 千人になっている。社会増が想定より多くなっているという現実があり、補正作業が必要と考えている。
- ・平成 20 年の転入超過が約 4,000 人。近畿周辺からの転入者がうち約 3,000 人。東京圏へはマイナス 2000 人の流出超過であるが、海外からは 1000 人の転入がある。区でいえば東灘が 800 人、中央が 1600 人、兵庫が 1300 人、灘が 560 人と、東部で転入超になっている。
- ・中国人の昨年の急激な増加理由については掴めていないが、昨年に限らずこのところ右肩上がりに増加してきている。たとえば留学生・就学生等の増加も一因ではないか。ビザの発給種類である程度は調べられると思われる。
- ・人口移動を住基により 5 歳階層で捨てることは可能だと思われる。

【「家庭」の扱いについて】

- ・所得格差について熱心に議論があったが、家庭の問題をとりあげてやっていったほうがよいという意見が多くあった。
- ・「家庭」という項目を加えることは賛成である。

【「六甲山」の扱いについて】

- ・市民の憩いの場としての六甲山についても、どこかで議論いただきたい。新聞報道で、人口あたりの公園面積の比較では六甲山を入れなくても神戸が一番大きく、パリに匹敵するという解説があった。ニューヨークには街の真ん中にセントラルパークがあるが、六甲山はさらに大規模なものである。政令市の中でも特徴をもったまち、となる可能性がある。
- ・ウォーターフロントの話が多い。六甲山についても加えてはどうか。

【行政の透明性の確保と情報発信力の強化について】

- ・家庭系廃棄物の1人あたり排出量が政令市最大になっているが、最近は6分別を進め、指定袋制度も導入し、22.5%も廃棄物の量が減った。それで1つクリーンセンターが不要になり、将来的にはさらにもう1つや2つ不要になるという話も出ている。婦人会の機関紙でも「市民に効果が十分説明できていない。説明してもらえば、市民は取り組む。」という意見が載っていた。広報のあり方とも関連するが意見をいただきたい。

【市民の満足度について】

- ・全体の印象だが、市というのは何のためにあるか、というと、市民のため、人のためにある。最終的には市民の満足度というところと関係する。それと資料に書かれている目指す3つの姿がどういう関係にあるのかが見えにくい。今後留意すべき1つの点だ。市民の満足度と施策の連関をどれだけ意識していくのか。この資料では行政が「提供してあげる」というスタンスが大きい印象を受ける。
- ・150万の市民が何を求めているのか。各種の満足度の調査を見ると、都道府県別でそのファクターは違う。県の中でも市町村別に違うし、市の中でも利便性を求めるところや環境を求めるところなど、分類することができる。
- ・市民の満足度を高める、というのも、今の市民を重視するのか、将来の市民を重視するのか。基本的には現在の市民を重視すべきで、多様なプリファレンス（好み、選択）に対応することが重要だと思う。かといって、好みのものばかり提供するのでは市は沈下してしまうのであって、将来に向けてどう提供していくのか、多様な市民への対応と、将来像の形成が大事だ。
- ・課題がどういう形で市民に一層密な分析は大変だと思うが一だいたいこの層に対応する、とか、将来持続可能な地域になるのに対応する施策である、とか、満足度との関係を意識することも必要ではないか。広報 KOBE 特別号の市民アンケートでも、自分たちの生活がいかに良くなるか、という内容の返答が多い。施策の効果がわかるような整理が必

要かと思う。

- ・市民満足度をベースに置くべきとは思いますが、市民生活部会では「生きにくさ」、「暮らしにくさ」を扱っていて、不快や不都合をどうすれば減らせるか、という発想を持っている。これまでのマスタープランにはあまりない考え方だが、100年に1度の不況という中で、普段から生きにくさを抱えている人たちには二重、三重に襲いかかっている。
- ・委員間の微妙な違いを、ここではっきりしておく必要がある。企業でいえば、いくら不満足を解消しても商品は売れない。魅力があることのほうが重視される。例えば、神戸のまちは坂が多いが魅力があるというように。今まで行政は、マイナス、不満への対処をしてきたが、そのほうがやりやすい。困っている人を助けるのを誰も反対はしない。喜んでいる人をさらに喜ばせるのは、格差を拡大するといわれるが、発想を転換しないとまちづくりは進まない。
- ・同志社大の橘木（俊詔）教授（経済学部）が「続 お金持ちの研究」として東京、大阪、神戸の研究をしている。大阪は有名な高校が集中しているが、神戸はバラついていてお金持ちが住み辛いという。上部の人を取り込むことが必要で、示唆に富んでいると思う。

【ソーシャルインクルージョンについて】

- ・単なる不況に加え、制度から外れている人、社会のつながりからの排除を変えていかないと、施策の展開が空回りしているのではないかと、ということからソーシャルインクルージョンという提案をしたが、資料では単に「地域で仲良くしましょう」とか誤解されたものになっている。
- ・ソーシャルインクルージョンについては、アメリカでは1960年代後半から、イギリスではサッチャー政権後のブレア政権の構想から打ち出された。同じことが日本でも小泉政権後の不況の中で大きく出てきている。ただ、一都市で出来ることは限界がある。震災復興も、従来は災害対策法に基づいて各省庁が予め決めていた補助の仕組みでやっていた。排除された人々をどうインクルードしていくか、お金の使い方は難しい。復興法のことを考えてもらって、それぞれの都市の状況にどう対応していくのか、金の使い方も考えてもらわないといけない。そういうことも頭に入れて、生活復興についても考えていきたい。
- ・ソーシャルインクルージョンだけでなく、100年に1度の危機という言い方をされるが、グローバリゼーションの影響が大きい。イギリスの動きもグローバリゼーションに対抗するためのものだった。
- ・企業が海外に出て行き、製造業で失業する人が出てきたり、雇用も契約労働になったりしている。ちゃんとしたお金をもらって生活できない人が増えている。ヨーロッパではベーシックインカム、所得保障の考え方も出ている。11月に同志社大学でベーシックインカムのシンポジウムを開いたが、多くて100人くらいの参加と思っていたのが延べ600人の参加があった。関心が非常に高まっている。一時的なものではなく、これから続いていく状況だろう。
- ・一都市で対応できないものもあるが、やらないといけないこともある。「所得が無くても

生きていけるまちづくり」というのは必要だと思う。エクスクルードされた所得の無い人をどう扱っていくか、は大きなポイントになる。

- ・同志社大学では浜（矩子）教授（経済学部）が「スラム化する日本経済」として外国人労働者やニートの問題を扱っている。4つのうち3つの人々をどうインクルードしていくか。労働問題は地域経済にも影響が大きい。アプローチを出していただきたい。
- ・ニートや外国人労働者について新しい提案ができるかどうか。神戸は福祉を「市民福祉」と言い換えて新しい概念を出したが、当時は「福祉は国がやるものだ」という国の見解を乗り越えて条例を策定した経緯がある。消費者問題も神戸から発信したもので、議員立法で消費者保護基本法を提案し、今の消費者基本法に至っている。神戸が新しいことに取り組み、条例にまで高めるのか、ということも含め、事務局で整理していただきたい。

【ソーシャルエンタープライズについて】

- ・イギリスではソーシャルエンタープライズが台頭し、国と強く結びついて地域の中で活躍している。日本では育っていないが、神戸が先行して着手する、という視点も必要だろう。
- ・賀川豊彦献身100年になる。パブリックセンターで全てを提供するというのは絶望的だが、100年前に既にソーシャルエンタープライズという概念が示されている。神戸発だというアイデンティティとして示していくべきではないか。
- ・コープこうべとイギリスのソーシャルエンタープライズとは実はほぼ同じ内容である。神戸が発祥の地と打ち出すのは1つだ。
- ・献身100年のシンポジウムで、野尻武敏神戸大名誉教授、今井鎮雄神戸YMCA顧問、日野原重明聖路加国際病院理事長の講演があったが、「兄弟愛」を基本にやっという話だった。「協働と参画」は役所が上から言う言い方で、本当は市民が下からの動きを高めていった結果がNPOなどの動きになっている。
- ・次の基本計画は自治体で作るものだが、市民が自分たちで作った、という形にできればいい。

（議題2 共通項目（行財政、人材）にかかる委員意見等）

【財政について】

- ・重要だと思うのは、神戸市の財政である。このままでは破綻も考えられるが、国から金を引っ張ろうと思っても国が先に破綻するかもしれない。財政再建の展望を明確にする必要がある。
- ・何でも行政が面倒を見ることは不可能で、相互扶助と民間にやってもらう部分の仕分けを明確にしていきたい。

【地域への権限・財源の移譲について】

- ・海外で財政難に陥った自治体の行動として、アメリカではスペシャルディストリクトに教育や消防などの権限を落としていく。あとは合併である。神戸市は合併は無理だと思うが、権限を落としていくのは1つの方法だ。もう1つは手数料など、受益者の負担を増やすことが挙げられる。国も財政的に大変な中では、そういうことに頼らざるを得ない。受益と費用負担を示すことが必要になる。ではどう進めるか。反対が大きい中で、地方政府がスムーズに行うためには信頼性を高めることが重要になる。政府の方針に優位に効くファクターは、政府に対する信頼性である。市の日々の行政の信頼をいかに高めるかが重要で、透明性を高めることが満足度にも関連する。
- ・枯渇する財源の中で満足度を高めるには、より近いところでサービス提供することであり、その中に地域の人が入っていくということが一つ。震災復興の時に提案され実現はしなかったが、ブロックグラントとして、神戸市全域ではなく、地域の中で資金を付けていくという方向になっていくのではないかと。

【行政の透明性の確保について】

- ・透明性というのは大事で、これからポイントになるのではないかと。婦人団体の要望の中でも、「行政の説明責任が不足しているのでは」という話があがっている。ペットボトルの分別の効果や、敬老パスの廃止の効果など、事業効果の説明が十分説明されていない。家庭でも、旦那が全て明らかにしていない家もあるだろうが、貧乏なら貧乏でこれだけしかない、とわかれば同意も得られるし、喜びも共有できる。市民満足を引き出そうと思えば、職員も満足していないといけない。行政も改革を進めているが、目に届かない。市民に理解してもらわないといけない。財政でもどことは言わないが、近隣市で非常に大変なところがあるが、神戸は震災も抱えてこれだけやっている。財政健全化の努力は、関西社会経済研究所の報告でも1位という評価があったが、その市民の理解を得ないといけない。

【行政の仕組みについて】

- ・協働と参画というのは現行の仕組みを前提にしているように思う。現行の、ウェーバーのいう「官僚制」を前提にしているから、権限もピラミッドで降りていくという発想になっている。住民に近いところでは、生活では縦割りはなっていない。生活者としての受け止め方と、プロバイダー側とが構造的に食い違っている。
- ・官僚制が縦割りを超えていきます、とか言っても、区の中で縦割りがあると、結局各部署が打合せをして急場しのぎになってしまう。行政の仕組みが十分議論されていないのではないかと。企業はマトリクス的展開などを行っているのに、行政の取り組みが少ないのではないかと。

【中間集団の衰退について】

- ・市民サイドの話として「中間集団」が衰退している。自治会や老人会、婦人会や労働組

合があるが、中間集団の役割や求心力が低下している。市民の活動が断片化して、市民活動の「運動性」とか「うねり」を生じにくくなっている。それに目を転じての議論がなされていないのではないか。

以上